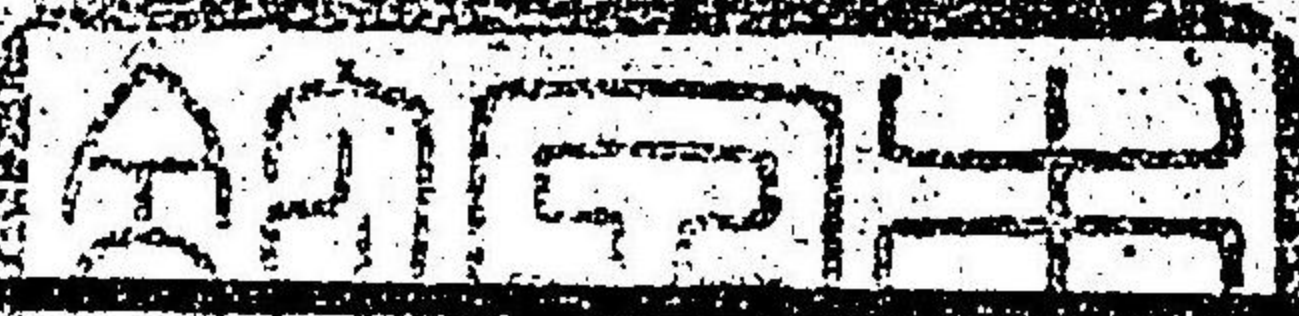


9

露國ア、ム、イワシツォフ、プラトノフ著
日本 吉田葩韋勒譯

西教一斑

正教會編輯局



凡例

一本書の我明治廿年露國長司祭フロトイエレイア、ム、イワソツォフ、プラトノフ師の著述の著述せしものよして簡略な西方教會なる舊新兩教會の我正教會に於ける關係異同等を敘述比較論辨す

先輩小野上田二氏屢々本書と同一種類なる書と翻譯し既々世に行

ゐると雖彼二書の大冊なるに此書の小冊子にして而も粗其要を盡

し彼二書の舊新兩教會の大体を論じて其諸派の起原傾向等を敘せ

ざるに此書の能く其缺を補ふ是れ今茲々本書を譯出して彼二書の

如き大冊高尙なる規責神學書を讀むの一助と供する所以なり

一本書中頗る些細なる事件と敘述し比較したる所ありと雖著者の意

蓋し單々舊新兩教の非を難じて正教の正教たる所以を明さんとす

るに非ざるを以て之を刪らる



一本書中所謂羅馬教西教との加特力教舊教をいふ即世人の謂ゆる
天主教なり正教東教との世人の謂ゆる希臘教をいひ波羅提士丹
教との新教をいふ正羅兩教の正羅馬兩教の畧羅波兩教は羅馬波羅
提士丹兩教の畧なり

譯者識

西教一斑目次

前編 羅馬教の教義奉神禮及教會組織

- 第一章 西教會の漸次より古正教より遠かりしこと並中世代の煩瑣主義の神學一般の氣風……………一
- 第二章 葩々の教會の首領なり不可誤なるものなりといふ羅馬教の教義……………五
- 第三章 這説の福音書上の基礎を論ず……………七
- 第四章 使徒の歴史よりする這説の基礎を論ず……………一七
- 第五章 羅馬教の聖神發出の教義并信經の毀損……………二三
- 第六章 羅馬教會の毀損したる神の義判及人々の救贖のと過分の勤勞及痛解機密のと懲戒煉獄赦罪票のと諸聖人と至

聖童貞女マリヤとを敬ふと等の諸理解 三四

第七章 羅馬教會の奉神禮の特点 四七

第八章 機密の執行上に於て羅馬教會の古傳を遠かれること並
既作の行事によりて (ex opere operato) 機密の効ありとの教
義 五八

第九章 羅馬教會の教會を管理する組織の特点 七一

後編 波羅提士丹教の教義並西方の基督教中より起
りたる新會

第一章 波羅提士丹教開發の事情及這教一般の氣風 八五

第二章 波羅提士丹教の正羅兩教に於ける關係 八七

第三章 波羅提士丹教の根本迷惑即教義に於ける教會の殊格を
否み教會の生活上に於ける神品の價值を否むと 八九

第四章 信仰と以て義とせらるるてふ波羅提士丹教の教義 九四

第五章 諸聖人聖像畫不朽体の尊敬及死者の記念に附きての波
羅提士丹教の教義 九八

第六章 宗教上の外事即敬虔なる外部の勤行及外儀に附きての
波羅提士丹教の教義 一〇三

第七章 機密に附きての波羅提士丹教の教義 一〇六

第八章 波羅提士丹教の絶待的預定説 一一〇

第九章 波羅提士丹教の分裂並其重立ちたる「リユテール」
「レフォルム」の兩派 一一三

第十章 十六世紀に當りて波羅提士丹教中に起りし極端の分派
たる「ソチン」
「アナバプティズム」の兩派 一二八

第十一章 英國教會及其諸黨 一二四

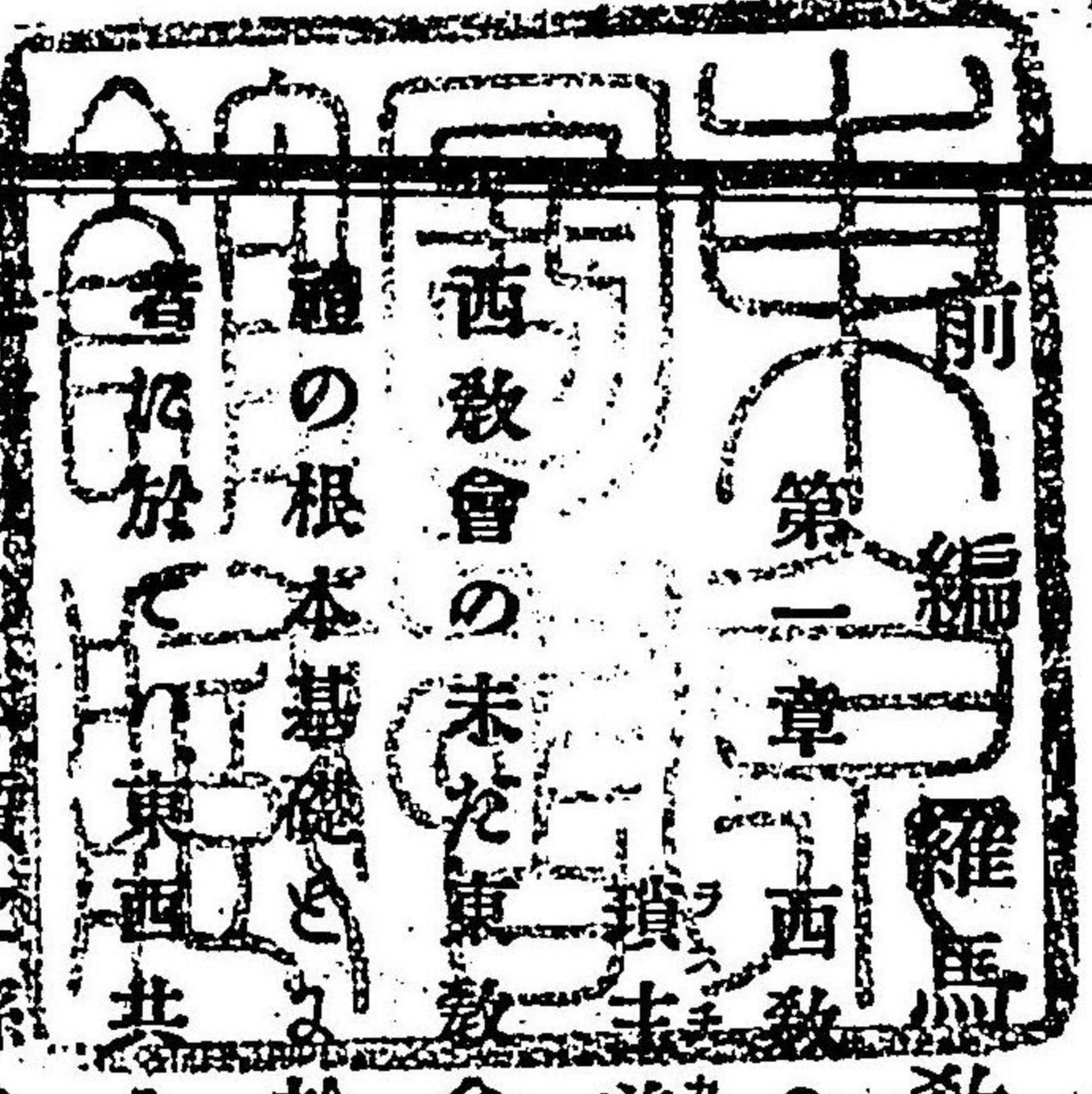
第十二章 十七世紀の後半及十八世紀の始に當りて西歐基督教
 中に起りし「クワケル」「ピエティスト」「ゲルングテル」「メトディス
 ト」「ヤンセニスト」「クウエテリスト」諸派……一三九

第十三章 十八世紀の後半期に於て傳播したる偏理論、唯物論、自
 然神教、「マソン派」「シウエデンボルギアン派(降神術)……一四二

第十四章 今世紀に於て傳播したる「イルウウァンギアン派」「レドスト
 ク派」「モルモン派」新哲學の偏理論、社會論……一五〇

西教一斑

露國ア、ム、イワンツォフ、プラトノフ著
 日本 吉田龍章勸譯



前編 羅馬教の教義奉神禮及教會組織
 第一章 西教會の漸次古正教より遠かりしこと並中世代の煩スホ

西教會の未だ東教會より分離せざりし時より、其教義と教會組織、奉神
 禮の根本基礎とを於て、相協和したり。但、教會の禮儀例へハ齋戒の如き
 者に於てハ東西共チカ少しく差異したりしかば、此れ固より僅少にして、
 基督教の本質に係れるものにあらず。教會組織、神品の權及地位、其人民
 に於ける關係等の些々たること、兩教會共に其地方人民の生計如何
 に由りて一様ならざりしも、其一様ならざるハ教會組織の根本規定の

法を犯さき。教義上は於て、六世紀よりして、かの聖神ハ父及子ヨリ發スといふ特殊の思考、西方は傳へりそめしかども、九世紀に至るまでの西方全土の信取するところとならざり、隨ひて尙未だ教會の公認せる信仰の定理中は算入するところともならざりしなり。

教會分離の時世——九世紀殊に十一世紀よりして、古傳に反する教義、教會組織、奉神禮の新設、頗る西方は傳へりしが、その主として、西教會の東教會と連絡を絶ちてより、後の適時に能く西教會をして其故意は出で若くは然らぬ誤謬と背反とより扣えしめ、又之を預防せし、達識の嚮導女東教會を指すを東方に失へるよるなり。抑西教會の其分離以前にも、分離以後の當初も、東教會に輩出したるが如き達識なる教師を有せざりしかば、東教會より分離して獨立し神學を修むる途に就きたるに固く其途に立つことを得せしめて、其代表者たる葩々及其他の神品さ

へ新設と迷惑との傳播を助くる者となり、時として、わからぬ不達よりして民間の妄見に迷ひて、不故意は之と教會の信仰中は加へ、わからぬ時として、貪名慕利の爲に、故意は虚譎なる理解と不正なる風習とを民間は廣め、甚しき一管た一步たをも東教會に譲らせしめて、益其分離を固くせん爲にさへ其前は維持したる所と捨て、古正教より遠かるの新説を思ひ出せり。而して、中世代の西歐煩瑣主義ホラの神學は、其思考上は信仰上の高尚なる諸問題を決するの堅き根據をも有せざり、善く聖書と教會史をも知らざり、又一般に神學上の確識と善良なる基督教的の方向ととさへ有せざりして主として、虚しく優美なる敏辯法ディに依り、動すれば知りつゝも眞理に反きて羅馬神品の利を圖るよ備へたり。されば此神學も亦信仰の諸理解を明し清むることを能くせしにあらざりて、反りて之を昧ませしこと少からざりしなり。煩瑣學徒は可能丈の比考と證據とを用ひて、

教會の信取するものを悉く確めんとしけるも、信仰の根本定理と一己人の私見と、妄信自利の妄想との間に、古教會の傳と葩々の新設との間、區別を置くことを能くせざ、只管又彼此を集めて一の整然たる教會の教系となし、可能丈多くこれが確定と證據とを得んことを勉め、確乎たる正しき證據に乏しきものあれば、知りつゝも虚偽なる者を捏造して之を真正なりとし、新教義を確めん爲るの古代の證明を毀損して之を引用し、若くは毫も古代に知られざりし證明を引用し、古作者の著書の之を闕文となし、若くは全く我意を縦にして他義を之を解釋し、古代の手書の肆に挿入改竄して之を毀損し、或は歴史上あらざる事件を捏造し、或は全く虚偽なる諸文章を編み、古教會の著しき教師の名を以て刊行したりしかば、遂に真正なる基督教の理解に放恣なる妄想迷惑を混トて、之に陥りし者又二者を識別するを得ざらしめたり。是なん後世

十六世紀に至りて純粹完全なる古傳を知らざるも、自己の熱情と學識とを盡して教會を改革し、煩瑣主義の神學を妄想迷惑より洗滌せんとしたるかの波羅提士丹教の神學者等が、其企圖に錯乱を來して基督教固有の許多の真理と古正教の傳とを、後世に至りて現れし葩々の虚偽なる妄想を列ねて排斥し、却りて中世代の新設と基督教古代の眞且聖なる傳となして、之を固執するの一起因にありける。

第二章 葩々の教會の首領なり不可誤なるものなりといふ羅馬

教の教義

羅馬教の教義の正教の教義に異なる至要の点の葩々と以て教會の最高不可誤なる見得べき首領、即地上に於ける神の代管者となすの定理ありとす。此教義の中世に於て、西教會は開發し、終り千八百七十年に開かれしワテイクンの公會に於て、葩々はい九世に斷然宣言せられし者

なり。正確なる基督教的判断を以てすれば、極めて單純なる比考よりするも、此定理の奇怪よして信憑すべからざるを明かなり。世の終に至るまで常に教會と共にする馬太二十のイ、ス、ハリストスを己が首領とするノ以弗所五教會の他に如何なる首領をも要せざること勿論よして、基督の神体たる教會に人頭あるを得べきとあらざれば、世々も暨ること無く永存し、全三一且只も地上も生存する人種の無數の群のみならず、既も此世を逝りたる信徒の無數の群をも包羅する妙体の首領となり得る者の死すべき人の中も一人もあるなし。されば最高最聖なる基督ステアミン徒も教會の會員たるに過ぎざして、使徒等も自ら己を教會の役者とこそは稱せし哥羅西一ノ二なれ。之も等しく、高尚なる不可誤の性を死すべき人の中何んも附記すべからざること明かなり。さるを、かの教徒が葩々を教會の首領、不可誤なる者と呼びて、之に惟一の神のみ相

當する權と性とと附記するの、即是れ、死すべき人を神の如くよするなり。

第三章 這説の福音書上の基礎を論ぜ

葩々の教會の最高、不可誤なる、見る可き首領なりといふ教義は何も基礎するか。

曰く、羅馬教の神學者等之を確めつらく、イ、ス、ス、ハリストスの地上に在し、間、躬親ら己の基せる教會の首領たらせ給ひしが、後、他使徒も超ゆるの特權と高尚なる不可誤の性と天國の鑰カギとを使徒、ペートルに賜ひて、恰も彼を諸使徒の王、即全基督教世界の帝王となして、之も教會の最上權を遺し給ひぬと。さてその證として福音書中殊も左の三所を指示す。

「第一」 イ、ス、ス、ハリストスがフィリッパケサリヤの境に至りて、猶太人及

爾等ハ我ヲ誰トカナスと門徒又問ひ給ひし時、シモン、ペートル先づ之に對^{また}へて、爾ハ基督、活神ノ子ナリといひしよ、イ、ス、ハリストスハイ、オナノ子シモンヨ爾ハ福ナリ、之ヲ爾ニ示シタル者ハ血肉ニアラズシテ天ニ在ス我父ナリ、我又爾ニ告グ、爾ペートル^石我我教會ヲ此盤上ニ建テシ、サテ陰府ノ門ハ之ニ勝タザラン、且我天國ノ鑰ヲ爾ニ與ヘン、凡ソ爾ノ地上ニ在リテ繫ク者ハ天ニモ繫ガレ、爾ノ地ニ在リテ釋ク者ハ天ニモ釋カレン、^{馬太十六ノ九}と宣ひき。

主が此又使徒ペートル又語り給ひし高尚なる約の、固よりペートルの人稱又關するものにあらせして、ペートルの表認、即使徒ペートルの此に初めて認め、其之を認むると同時に他の諸使徒も之又與り、且次ぎて全基督教世界の所有となりたる基督教の信仰其者又關すること、此談話全体の意よりして明なり。ペートルの先づハリストスを活神の子^{いくるかみ}

と認めしに實に肉によるよあらせ、即人間通常の比考よよるにあらせして、天父の親しく人々に啓示し給へる至上の表認、即ハリストスを神子と信ぜるの信の人類の貞石となり、基督教會の之に基^{もと}けられて現時よ至り、かくてまた世の末に至らんとす。シモン先づ此信を表認したるがゆゑに、主先づ教會設立の爲又採用し給へる石^彼と名け給ひしも、此信仰のたいにペートル一己の信認なるのみよあらせして、他の諸使徒及全^{ハリストス}基督教徒の普有信認なり。かゝれば、聖書に他使徒も亦、ハリストスよ於けるの信を傳へ之と確むるに與りたる者として、教會の依りて以て立つところの基址と名けられし^{以弗所二ノ二十四}のみならず、ハリストスを信ぜる者は、皆教會の大建築を組成する石と稱せらるゝとと得るなり。^{彼得前書}されど、此建築をして固立せしむる最首基礎、即偶^{ふた}石と名けられ、又其戴く所の一首と稱へらる可き、只ハリストス自身の

みなり。以弗所二ノ二十至二十二彼得前書二ノ二六ハリストスに於けるの信
ハ天國に入るの道と開きて、人に其鑰を與へたり。乃先づ此信と表認し
たるハペートルなれば、彼先づ罪を繋ぎ釋くの高尙なる權と得たり。さ
れバペートルと同一の信と有したる他の使徒も亦、次ぎて同トク爾等
ノ地ニ在リテ繋グ者ハ天ニモ繋ガレ、爾等ノ地ニ在リテ釋ク者ハ天ニ
モ釋カレン。馬太十八ノ二十八約翰三ノ一の主の言を聞きたり。かくて、諸使徒が
此權を教會の牧者に傳へてより、其常に變へるとなくして教會を保存
せらるゝこと、猶ハリストスに於ける信の如し。

〔第二〕 イ、ス、ハリストスハ其門徒と共に秘密の晩餐を開きて、最後
の談話と爲し給ひし時、門徒中に起りたる長者權の争を禁めて、忍耐と
主に順從するよと、に、將來の天國に於て高等の賞を與へんことと約
し給ひ、特に又使徒ペートルに向ひて、シモンヨシモンヨ「サタナ」ハ麥ノ

如クニ爾等ヲ散サンコトヲ望メルモ、爾ノ信ノ絶ヘザルヤウ、我已ニ祈
リヌ、爾轉移シテ後爾ノ兄弟ヲ堅メヨ、路加二ノ三十二ノ三十二と宣ひき。

羅馬教の神學者等ハ、此言中にも他使徒に超ゆるペートルの特權の教
示ありとして、以へるやう。イ、ス、ハリストスハ、此ハ信仰上不可誤の
高尙なる恩賜と上より受けたるペートルの、主に繼ぎて主に従ふ者の
首となり、諸使徒及全基督徒の爲に信仰の嚮導者となるべきを宣へる
なりと。されど此には使徒ペートルと約せらるゝ特權に附きての言一
言だになく、却りてたゞペートルの前途は横にれる誘惑と墮落との悲
哀なる預言と預戒とのみなるは、此言の意義と連絡とによりて明けし。
此言全体の意義ハ、爾等ハ今ニ至ルマデ我ニ忠ニシテ、我患難ノ中ニ在
リテ我ト偕ニシタリシカド、同二十八、今大ナル誘惑ハ爾等ノ前ニアリ、
「サタナ」ハ麥ノ如クニ汝等ヲ我ヨリ散サンコトヲ望メリ、ワキテペートル

ルヨ爾ハ已ノ順從ヲ我ニ信セシメント備ヘタルモ、誘惑ニ遇ヒテ先ヅ我ニ反カン、サレド我ハ主ノ爾等ヲノ誘惑ニ對シテ堅ク立タシメ、カツ爾等ノ蕩漾セル信仰ノ終ニ至ルマテ衰ヘザランコトヲ祈リヌ、誘惑ノ時過ギナバ、爾等復我ニ向ハン、ペートルヨ之ヲ記憶セヨ、爾ハワキテ誘惑ニ遇ハン、爾自ラ人ノ弱キヲ知リ墮落ヨリ起キテ後他人ニ注意シ、爾ガ兄弟ノ信仰ヲ固クセヨ、となり、ペートルも特權の約として此言を受けしにあらざり、墮落の預戒として之を受けしなり。その此言も次ぎて、ペートルの己の主に従ひて獄と死とに趣くに備へたるを、強ひて主と信せしめんとし、十三主の之を答へて一層明白よ、ペートルの同夜も三たび主を諱まんとするを宣ひ、次ぎて又諸使徒の其誘惑に備ふべきを復し給ひしを至三十八見て知るべし。且又主のかく宣ひしに、其弟子が特權を望みしを責め給ひし後直なりしにも注意せざる可らざり。至二十五

かくてもなほ、主ハ此排斥も次ぎて、他弟子に勝るの特權を一弟子に公與し給へりと思ふと得べきか。

「第三」 約翰福音書第二十一章に、イ、ス、ハリストスハ、復活後の或る

日テ、イワリアマの湖ニ漁リ居たる七弟子ニ現れ、奇異なる漁を賜ひて之を饗し、且筵間左の言を以てペートルに向ひ給へり、イオナノ子シモンヨ爾ノ我ヲ愛スルコト、彼等ニ超ユルヤと、ペートルの之を答へて、主ヨ然リ爾ハ我ノ爾ヲ愛スルヲ知ルといひしに、ハリストス我ヲ牧セヨと宣ふ、かくて又問ひたまふやう、爾我ヲ愛スルヤと、ペートルハ主ヨ然リ爾ハ我ノ爾ヲ愛スルヲ知ルと答ふ、主又宣ふらく、我羊ヲ牧セヨと、かくて又イオナノ子シモンヨ爾ハ我ヲ愛スルヤと問ひ給ふよ、ペートルハ主の三たび我ヲ愛スルヤと宣へるより、憂ひ悸きて、主ヨ爾知ラザルトコロナシ、爾ハ我ノ爾ヲ愛スルヲ知レリ、と答へしに、主は我羊ヲ

牧セヨと宣ひ、且ペートルの老いて後に遭はんとする受難の死を預言し給ひき。^{十五至}とあり。

羅馬教の神學者等は此談話中にも主のペートルは賜へる特權の教示ありとし、主の此に全教會の上、即、羔たる通常の信徒及羊たる牧者の上、^ハ於ける、特別の最上權をペートルは托し給ひしやと思惟す。されど、ハリストスは此また、^ハ前の墮落を憂ふるペートルの良心を貫きて悔改を勵ましめ、次ぎて又彼を慰め、且他使徒の面前に於て彼を使徒職に復せんと欲し給ひしのみなることは、人間通常の確識と教會古代の教師との共、是認する所なり。夫れ、ハリストスは爾我ヲ愛スルヤとの三次の問を以て、ペートルは其三次の諱を憶はしめんとしたまひしに、^始單に爾我を愛するやと問ひ給はせしめて、爾我を愛するは他人より超ゆるや否やと問ひ給ひしは、^ハペートルは其弟子皆礙ヘラレテ主ヲ棄ツトモ我ハ主ト共ニ獄を憶はしめんきてなり。此言も、^ハ如くその効を奏しぬ。主の三たび彼に

問ひ給ひしとき、ペートルの憂ひしは、固より已が墮落を憶ひしよ、^ハればなり。かくて主は我羔羊を牧せよと三たび反覆して、ペートルを使徒職に復し給ひき。されど此言中にはた、^ハ他の諸使徒も賜はり諸使徒よりして又、神ノ群ヲ牧セヨ^{彼得前書}五ノ二三とて教會の諸牧者に傳へられたるの權あるのみ、^ハして、如何なる特權もあるなし。ざるをハリストスハ此、^ハ羔を以て通常の信徒を意味し、羊を以て牧者を意味し給へりと確むるは、^ハ獨り放恣なる煩瑣主義の解釋のみの能する所なり。終り、主のペートルは受難の死を預言して談話を結びたまへるよても、^ハ前談と三次の諱と親密の關係を有すると明なり。かの秘密の晚餐のとき、^ハペートルは^ハ自負して、諸人は主を棄つとも我は主に従ひて獄と死とに行くと備へたりと確めたれば、主は之に答へて、其自負は同夜の中に三次の誘惑に辱められんと宣ひしかき。今やペートルは主の問に對して、敢

て己の主を愛すること他人に超え、又主の爲に死するも備へたりと確
むるとせせ、却りて己の墮落を悲みて、溫柔に主ヨ爾知ラザルトコロ
ナシ。爾ハ我ノ爾ヲ愛スルヲ知ル、と答へたれば、主は彼と前職に復する
ことと確め、且其將に相當なる受難の死を以て使徒たるの一生を終へ
んとするを預言し給ひたり。
くろしめをうくる

斯くの如く羅馬教の神學者等の指示する福音書の箇處中に、イ、ス、
ハリストスは他使徒に勝るの特權をペートルに賜へりとの如き意を
確むるものありとは見えざるなり。概して此思考の福音の全精神全旨
意は反言すと言ひざるべからせ。イ、ス、ハリストスの何事も於ても、
驕傲の精神に反對し特權と望むも反對してなし給ひしばかり、強く其
弟子を責め給ひしことなく、又何事に對しても、斯くまで熱切に預防し
給ひしこともなかりき。彼常に其門徒に勸むるも、斯くの如き望の基督

徒社會よ所を占むべきものゝあらし、彼等の間には昔者末者あるべから
らせ、彼等の中には何人も、父、師若くは主と稱せらるゝさへあるべきに
あらし、彼等の皆兄弟と稱して衷心より相役すること、猶其神師の親し
く至高の鑑を示せるが如くにすべしとの意を以てし給ひき。
馬太二十
一至二十八路加二十二ノ二十五至二十七馬可
十ノ四十二至四十五約翰十三ノ十三至十五

第四章 使徒の歴史よりする遺説の基礎を論ぜ

次は羅馬教の神學者等のペートルが主の昇天後に基督徒の首領、使徒
の王、教會の最上治者たりしやの根據を使徒の歴史中に見出さんと勉
む。さて此教義の證として、彼等の殊に好みて指示するは、使徒行實前半
の諸章、即或る時に際してペートルの人稱の他使徒の人稱に抜出でし
箇所、例へばペートル先づ一門徒を撰びて墮落したるイウダの後とせ
んことを發言し、聖神降臨後、彼先づ傳教を爲し、彼先づ異教徒ヨル

此を基督教に歸依せしめ使徒公會より彼先づ發言せし箇所なり。され
 ば此等の諸事跡ありとも、何の特別なる事があるべき。凡そ使徒中より起
 らるる諸問題の或る一人の發言するところとなるを得たりしも、之を
 決せしめ全使徒の同意なりしなり。斯くして、十三使徒の一人なる
 マタイの墮落したるイウダの嗣を補はれ、第一章最始の七補祭も撰ばれ、第二章使
 徒會議に於て舊約の儀式法の異教より基督教に轉したる者の爲る不
 義務なるとの問題も決せられしなる。第十五章
 使徒パウルの言に「使徒の中にて特異尊敬せられしハ、ペートル
 イネズ、及イエルサレムの教會長、主の兄弟イアコフの三人にして、共
 に教會の柱三章九節の如き者と算へられたり。されば彼等の他使徒の上
 に如何なる特別の權利主權をも有せしにあらざり。パウルは聖神降臨後
 に至りて使徒職を召されし自身をさへ、他使徒より毫も卑しき者とは
 せず。二章一節

前章九節 是を又或時には「ペートルと争ひ之を責むるをも必要と認めたり。」二章二節
前章九節 一般に使徒等は或る基督教者が宣教師の甲若くは乙の殊格と慕へるも
 反對したり。中にもパウルはコリントの基督教徒の、一はパウルに屬する
 者、一はペートルに屬する者、一はアポルサスに屬する者、一はアポルサスと稱しけ
 るを、嚴責していへり。ハリストスに諸人、爲ニ一ナラザルカ、パウルは
 爾等ノ爲ニ釘ウタレシカ、將爾等ヲパウルノ名ニヨリテ洗テ受ケシカ、
 我等ハ神ノ旨ニヨリテタメ役者タルノミニシテ、爾等ハコレニヨリテ
 信ゼシナリ、我等ハ同シク神ノ王者ニシテ、爾等ハ神ノ田、神ノ室ナリ、一
 人種ヲ蒔キ、他人之ニ灌ギテ、神ハ之ヲ長セシメ給ヒス、種々者ト濫ク者
 無ニシテ、事皆長セシムル神ニ歸スルナリ、何人モ或ル人ノ故ヲ以
 テ誇ルコト勿レ、パウルアポルサスキーフニマレ、世界、生命、現世、未來ニマ

レ、皆爾等ニ属スルモノニシテ、爾等ハハリストスニ属シ、カリストスハ
 神ニ属スルナリ、哥林多前書と、一、二三章
 今假クは、使徒ペートルは實際ニ他使徒の上ニ特權を有したりとす
 も、そは又如何にして羅馬の能々ニ關係あるを得べかりしか。
 羅馬教の神學者等はいふ、使徒ペートルは全基督教世界の首領、教皇
 なりて、羅馬を撰びて己が王宮となし、此處に教會を基し、此處ニ二十
 五年の間主教となり、此處に致命の終りを受け、且終に臨みて教會上の己
 が權を其後嗣者ニ傳へ、彼は繼ぎて羅馬の主教となりし者ニ傳へ、かくて
 後此權は一能をより他能を傳はれり也。
 此斷案は皆正しからば、公平ニ歴史上の事跡を觀察すれば、左の如し、第
 一前にも明せるが如く、使徒ペートルは基督教世界の首領又は如何なる
 教皇よてもあらざりしなり、第二使徒ペートルの羅馬に住みしは三十

五年間もあらざり、斯かる年時の計算は、ペートルの他所は傳道したる報
 知主顯語するなり、第三元主教主は己が教會ニ常在するニ地方教會
 の治者の名稱なれども、ペートルは他使徒を同し、基督教を諸邦諸會
 とも固めたり、故にペートルは羅馬の主教よてもあらざりしなり、第四使
 徒ペートルを羅馬教會の基礎者と特稱するは、爲し得べからず、羅馬
 教會を基し之を立れば、ペートル一人なるのみならずして、パウロと與
 ませしなり、ましてパウロの彼教會を立て、其第一の主教リンを立つる
 是の生存中、與りたるは、寧ろペートルより多かりしと陳ふる基礎
 あるとや、使徒行實の末章及使徒パウロの羅第五使徒ペートルの一人よ
 て若くはパウロと共にして立てし教會は他所よりも多し、例へばアンテ
 オヒヤの教會を立てるに、兩使徒の與りしこと、羅馬教會と比して少か
 らず、アレクサンドリヤ教會も使徒ペートルの開基せし所にして、其第

一の主教はペートルの最愛弟子たる、福音者マルタなりしなり。夫れ教會の發生よりして言はば、ハリストス、ハリストスの親ら開基し給ひしに、エペサウの教會、全教會の母たる教會の他教會より古くして尊きと疑ふべくもあらじ。聖神降臨後は基督教の世界の四極を傳はんとめしは此地にして、諸使徒の互に面會して傳教の進歩を報告し、互に教訓をなむ、互に談合せん爲め、其遠き旅行地より稀ならず落合ひしも此地なり。且古傳によれば、十二使徒の一たる主の兄弟ヤコブ、ヨハネ、ハリネトスに親むて立てられて、此地の第一の主教となりしを、第六以上陳べし如く、ペートルは主教ありて、たゞ主教等を羅馬の主教をペートルの主教權の後嗣者と算へ得べきよりあらざるを、ペートルは存せざりし、教會の或る最上權の後嗣者となるを、

ペートルの死に後とも尙或使徒等の生存したるも、羅馬の主教等が教會の最上治者と算へられしと陳ぶるは、争か奇ならざるべき。ハリネトスの最近最愛弟子にして、ペートルの死後三十五年餘も此世に生存せし神學者イオアソも、羅馬の主教を教會の最上治者首領となし、之に伏從したりしと陳ぶるは奇なるかな。聖神降臨の初に、第五章、羅馬教の聖神發生の教義并信經の毀損、三位一體の教義、聖三者の教義上よ於て、羅馬教會は正教會と同しく、三位一體、羅馬教會出版會あるは此に、三位一體、一體として同榮なる聖三者、父と子と聖神とを於ける信條を承認すれども、東教會の其信經よ於て讀み且教ふるが如く、聖神はたゞ神父より發す、其存在の初を受くとは説がきして、父と子とよりすじなし、之を信經の中より挿みたり。されば彼教徒は、ニケヤ王城の信經第八款を、我信ず聖神、生ヲ施スノ主、父及子ヨリ (a Patre Filioque) 發生

夫れ斯かる教義は古になかりしなり。基督教の初代より、東西の
 信徒は皆聖神の父より出づるを信じ、教會の教師等も舉りて、聖三者の
 三位は至高同等にして一體共永なれども、父を以て子の生出し聖神の發
 出して其存在を受くる第一位、第一原因、源泉、本源として算ふべしと教
 義たりき。神の生出神の發出とは如何、又此の二者は何を以て異なり。
 教會は聖三者各位の發生と其相互の關係との教義を不可違の奧義と
 認め、此問題に關しては放恣なる思辨をなすを許さず。却りて聖神の
 發生のことは、イ、ス、ハのストスの會で秘密の晩餐の時其弟子等は
 彼に父より發ス約二十五と宣へる外、毫も聖書上に見えざれば、教會も
 此教義に於てのクリスチエの言は如何なる附言をもなさずして、文字
 の儘にこれを維持せんと勉めたり。ざるを第二全地公會王の時に當り

ヤグ下ニホの異端起りて、聖神のこの教義を一層明白に陳ぶるの必
 要現れむかば、教會はクリスチエの彼に父より發スとの言は何の附言
 をもなさずして、文字の儘にこれを信經の第八款に入れたり。斯くて其
 後の諸全地公會よては此信經王城を朗讀せしむ之を變易すること
 をせざ、反りて如何なる増加變易をも爲さざらむとを確め、亦此信經は
 基督教教化の好時代四世に當りて開かれし最初と、兩全地公會よては
 最著シキ教父等ノ編述セシ者ニシテ、其中ニハ一言トシテ最適切ニ基
 督教の正シキ教旨ヲ言ヒ顯サシルコトナク、每言皆會ニ教會ヲ乱シ
 或ハ教義ニ反對シ、換言セバ、或ハ異端トシテ戰ハ爲シ、教會ヲ編述セシ
 者ナレバ、後世教會ノ異端ヲ斥ク所ニ際シテ、堅城トナリ得ベシ、信經
 至高ナル記念ナリとて、教會も大之を尊重したりき。されバ古代教會
 は三ツヤ王城の信經を待するは、斯くて大なる尊敬を以てして、一言だ

此之を變易すること許さず亦他の如何なる信經をも之に換へて、教
 會一般の使用を供すること許さざりむなり。其の如く古昔西教會中
 には東教會に在りたる如く、首章にも既に記せるが如く、古昔西教會中
 には東教會の教父等の所説は依りて間
 の定理の良釋者として現れしかども、其獨立して神學上の思辨をなす
 こととなりてより後には、理解の不適切を錯乱とに陥りしと少からず。
 彼聖神は父及子より發スといふ教義の重なる源も此に在りしなり。夫
 れ西方の神學者等は聖神の此世に於てしたる一時の發生、即其顯現作
 爲の理解を、聖神の永遠なる發生、即其存在の永遠なる始原の理解に混
 して、遂に聖神は其存在の永遠なる始原に於ては、父及子より發すを教
 義するに至れり。さて此教義は六世紀に當りて先づ西班牙に廣ま方を
 めしが、其此地に傳播するを助けしは、正教にアリテ教徒たる文士に

ト一人との論戰なりしと見ゆ。アリテ教徒は神子の位を卑めて、神父も同
 トからせと論せしかば、同地の正教神學者等は、我々者も皆爾の者ナリ、
 爾の者も我々の者ナリ、我々の父も有テ爾の者も皆我々の者ナリ、約
 十、十六、五ノ十の救主の言に基きて、子の父も同等一體なるを證せん
 と勉めし
 り、或る輩は是よりして、聖神若シ父より發スルナランニハ、父ト一
 體ナ
 ル子ヨリモ亦發スベキナリと推論したり。斯くて彼等は前記の基礎よ
 りして、子及び聖神は父と一體なれば、子若シ父ヨリ生ル、ナランニハ
 亦自身ヨリモ生レ、聖神ヨリモ生ルとの奇怪なる異端の意味をも推論
 し得べきを辨へ、斯く神性も存在の二元と許容するは、聖三者の本体
 に多數復雜混亂區分を附するなるを辨へ、亦聖三者各位の一體同等
 なるは、三位も通有する神の性全例へハ純善睿智もあるも、之を外よして
 ば、三位は皆一位特有の性即神父ハ世の前に生れ、聖神ハ神父より發するが、

ありて各位に別属するも、若しこれなしとせば、吾人の想考に聖三位の混ざるも辨へざりき。

古教會の或る教師等が、イリネオ、ハリストスの言を信經の教示とて、合して、聖神、父より發するを承け認めつゝ、聖神を神子の神、ハリストスの神、神子固有の神、神子より生存するの神と名けしるをも時としていひあり。されど彼等ハ此名稱を以て、聖神ハ其存在を神子に受くとの意を言ひ顯したるにあらざり。たゞ聖神ハ神子と共ハ唯一の分たれざる神体と存在の源——神父とを有し、イリネオ、ハリストスの人稱ハこゝなく聖神の恩寵を滿被し、又教會に常在する聖神ハ教會の中ハ在りて、ハリストスの事業を永續完成すとの意を顯し、ハリスストスの事業とハ、ハリストスの受身と苦難とによりて始まりたる人類救贖の事業をいふなり。又聖神を神子より遣はさるゝ者、神子によりて發する者と名けしるも、聖神ハ人より發せざり、亦聖神ハ己が永在の源を神子より受くとはいへらざる。聖神ハ

五旬節の日に、使徒等の上に降りて一時世に現れ、且此時よりして神子の神保により其功勞によりて、何となれば、神子ハ己が苦難——十字架上の救贖の爲に聖神を人に遣さん、己が恩賜を信者より賜ひつゝ、教會に常在すとの意にてかくいへるなり。概して教會古代の教師、殊に東方——希臘の教師ハ深く定理の意義を了解して、能く高尚なる神學上の理解、表彰等の精微なる差異をも分別したりき。此点に於てハ中世代の西方神學者等の遠く及ばざる所なり。

抑聖神は子よりも發すといふ教義の、初めて宣言せられて信經中に入りしは、五百年正教の西班牙に於て、アリイ教に勝ちたる凱旋と確めし、第三公會にして、後此教義は西班牙より他邦にも傳はれし、かゝるは只隨意として受け、又は著しき神學者等の取らざる私見と、傳はれしのみなり。七世紀に至りて此新説のよし東方にも聞えければ、西方の教師等の不相應なる隨意を囁き始めぬ。希臘教會の教師たる

表信者マクシムは西方の神學者等も如何なる意味にて聖神の子より
 も發することを解するや、聖神の存在の永遠なる始原の意に於てする
 か、將又其此世に於ける一時の現顯の意に於てするかを問ひたりしに、
 西方の神學者等は、當時尙未だ此問題に於ける一般の定見を有せざし
 て、正教の教義の意味を反せざる答を爲し、カバ希臘人もこれにて安
 堵したり。八世紀の終に至りて、聖神子よりも發すの教義は佛蘭西に傳
 はれり、頃しも佛蘭西にはアライ党類似の異端者アドプチアニストあり
 りて、イハス、ハリストスの神子たるは性よるにあらざして、たゞ義
 子となれるよよるのみと確めたるに、佛蘭西の神學者等も亦西班牙の
 神學者等のアライ党に對して發明したるが如き虚證を用ひたり。然る
 も當時最強大なりし西方の君主カルル大帝は、聖神子よりも發すの教
 義を傳ふるは、新定理を宣言するの權を西教會に歸して、其地位を高む

るの極端なりと見しかば、己が管下なる佛蘭西の神學者等に、アヘンの
 公會九年に於て、這教義を探究せむことを勧め、且自身も此會に臨みて
 議長席に着きぬ。時よ己が君主の意を迎ふる主教等は、此教義に従ひた
 りしを、これが終結の確定を爲し、且之を信經に入るとが爲まは、使者を
 羅馬に遣はして、カレオ三世の同意を乞はしめたり。かくて使者は新
 定理を容れんことを久しくレオに説き勧めしに、レオはカレオの意を
 迎ふるの自己より利なるを以て、直接に其意を反對することを欲せざし
 て、レオ這説は餘りに高尚なれば、斯くも高尚なる奧義を了解するに任ふる
 者こそ、之を受くることを得べけれど、曖昧に答へしも、這説と信經を入
 ることよは反對せり。又古信經を不觸に守らん爲に、如何なる附加を
 もせせして之を三箇の銀版レオに刻み、レオが上に予レオ
 正教の信ヲ愛スルニヨリ、カレヲ守ルガ爲ニ之ヲ置クと記して、レオ

聖使徒の守護の下に置くが如くに、之を羅馬の天聖堂にある聖使徒の
 棺の側に安置すること命たり此銀板は中世代たれの所取除かれしに安置すること命たり。此銀板は中世代たれの所
 斯くの如く遺説は九世紀に至りても尙未だ西教會の一般に認むる定
 理とはならず、能々等自身の容るゝ所ともならずなり。されば、
 同世紀の半より西方の宣教師等は、コンスタンティノポリの總主教
 不在位の時、新たに歸依したるボルガリヤにも、斯かる誦讀を傳へた
 り。是も於て總主教フオテイは熱切に之を反對して、己が廻狀中より古
 教會の證明と、神學上の種々なる比考を用ひて、全基督教世界の
 西方の新設の不法なるを證せり。能々ニコライ一世は、之を憂ひむ
 が、理に合ふ勸告と聽きて、前より許容せる遺説と正さんとせせむ。却り

て驕傲不遜にして、歩を東方の總主教に譲らざらんためはのみ百
 方之を拒がんとせり。彼佛蘭西教會の主教及神學者等も書して、
 遺説は爾等の下より出でしものなれば、殊に爾等の詳にする所な
 るを得せ、故に爾等は東方の總主教の之を攻撃するを防がざるべから
 せと。これ聖神は子より發すといふ教義を辨護する諸著作の始めて
 西方より出でし所由なり。斯くて不了達によりて起りたる教義の爲に學
 術上の虚偽なる基礎を集めて、これを信仰の定理中より入ること、は
 なりぬ。されど此後とても尙或る能々は、この新設を避けんとしたり。
 フオテイと和睦せんことを希望したる能々イオアン八世は、其フオテイ
 より送れる書中より、曩に無勘考によりて容れられたる此意見を絶さんと
 思ふむねを述べ、かつ此意見は既に其根を深くしたれば、之を斷つに若
 干時を假さんこと乞へり。イオアン八世の使節等も、紀元八百七十九

年コンスタンチノポリの公會に於て、希臘の主教等と共に、己が追加を以て聖なる信經を害ふ者（セトセ）を「アナテマ」に處しぬされど此公會の後、ホルガリヤ教會を治むることよりして、復フオーティと葩々との間も爭論起リ、イオアン八世の善良なる希望は忘れられて、毀損せられし信經は愈々西方に傳はりしが、兩教會の交通絶えてより後は、既に之を預防する者一人だになかりき。

第六章 羅馬教會の毀損むたる神の義判及人々の救贖のと過分の勤勞及痛解機密のと懲戒煉獄赦罪票のと諸聖人と至聖童貞女マリヤとを敬ふと等の諸理解（カトリック）西方の煩瑣主義の神學は神の無限なる義判の思考を以て神の愛の觀念を暗ませり、即ち救贖事業に於ける人を固有の功勞——人々の善行も過分の價値を附け、遂には教會の委ねられたる基督徒の救贖に於け

る、神品權の價値を誇大にして、人の神に於ける關係、即、人々の神の前（カトリック）に義とせられ、救はるゝ、必要條款に於ける基督徒の常識を毀損せり。而して彼羅馬教徒が痛解（カトリック）羅馬教會出版書に告機密（カトリック）教會にて秘蹟と譯すは彼と恰も罪ある人々の上を行ふ一種の宗教裁判の如くも心得、懲戒を罪のため（カトリック）の罰の如くに心得ると、かの謂はゆる過分善行の寶藏のと、煉獄及宗教裁判（カトリック）のと等の野鄙なる毀損せられたる諸理解の出でしもこれよりなるなり。

羅馬教の救贖説は、各人皆當（カトリック）來世に於て、その行によりて賞を受くべしとの正しき基督教の意見も、中世代に於てたゞいたく野鄙な偏頗な此正しき意見を解釋したるのみなり。抑、人の其行によりて賞を約せらるゝも、その人の行の自ら價値を有するよるよあらまむて、神の恩寵の力と、ハリストスの救贖の献身とよるなるよ、彼等の意をこ

ゝ注ぐこと少くして、いたく野鄙に機械的に善行の數とそが爲に受けんとする賞の量との相應を解し、また神言の明白なる證明と徳義上の正しき理解とを反きて、或る人々が己の救はるゝが爲に要する量に超ゆるの善行をも爲すことを得るやよいひなす、譎説をも思ひ出せり。彼等以へらく、多く善と行ひし者は來世に於てそに應る多量の幸福を受け、善行少き者は、幸福と受くるの權もそに應りて少かるべし。義なる諸聖人、わきて至聖なる童貞女マリヤが其生存中に積める善行の自身の爲に幸福の高點を備へしかども、其若干量の猶不要、過度、過分の善行の如くよして餘れり。さて神の公義に此善行をも賞なきまゝとするを得ざれば、それを己が善行を以て救贖と幸福とを受くるに堪へざる者の所有とし、その功勞とするを得るなり。

こは如何にして行はれ得べきぞ。いはく、パリストスの教會は、救世主

神母及其他諸聖人の過度過分なる善行の餘功を譯する者はなり。寶藏Thesaurus, Sori- num 財、櫃ありて、そも亦全教會と同じく、使徒ペートルよりて主より天國の鑰を委ねられし教會の首領、地上に於ける神の代管者たる葩々の司配に屬するなり。葩々は己が權の力にて諸聖人の善行を罪人等に賦與して、之を其功勞中算入し、且或る程度までは此權を下級の神品に附することを得。そは教會上の權利主權は一は皆葩々權を、一般の源泉とすればなりと。

神母及諸聖人の過分善行説は連なりて、中世代の羅馬教徒間より開發せし、妄信なる過度の聖人尊敬なり。夫れ正當なる聖人尊敬は、神を敬ひつゝ、神に近き人々、神に悦ばるゝ人々をも敬ふを要すとの、正しき基督教の教旨に基くものなり。然るも、新異教を去りて基督教に就ける人民が、古異教の諸神に附きての想考を基督教の諸聖人に附して、止に神に悦ばるゝ者として之を敬ふのみならず、恰も或る個々の神、即、各自力を以て人生

の境遇を主宰し、神恩を依らざして己が固有の能力を以て人々に助くることを得る者として、之を敬ふもある、稀ならぬふさなるも、中世代の彼教會の神品等は、斯る妄信の理解を滅滅するに尽力せざりしのみかは、反りて私利の爲に故意に其説の民間に傳播する力を添へしかば、不實の奇蹟、他國に在る數千聖人の不朽体等の空談起りて、人民太く之を妄信するに至れり。さるが中よもわきて開發せし、至聖童女マリヤに附きての誇大なる想考なり。正教會ハマリヤをヘルロサムより尊く、セラフヒムに並びなく榮ゆる、神母として彼を敬ふふさを命ぜれども、中世代の羅馬教徒の彼を敬ふふさ、却りてハリストスを敬ふふさへ超えしと少からざりき。かくて聖母は無玷に産まれて生れたりとの説 *immaculata* も開發せり。彼等ハ、神人たるハリストスを除きてハ、何人も皆自然的に元祖アダムより生るゝなれば、元罪に與かる者として此世に出づとの、基督教一般の教旨に反きて教へつらく、童貞女マリヤハ超越自然的に産まれて生れしかば、其被産及誕生の時にも元罪に與からざりき。抑、這説の始めて西方の或

る神學者間傳はりしは十三世紀よりして、當時は太く非難せられども、後愈蔓延して、既に千八百五十四年羅馬の公會に於て薩ッピイ九世に確められ、公よせられて、一般に信認すべき定理とはなりぬ。

教會權の力にて諸聖人の善行を有罪なる人々に賦與することは、先づ痛解機密より行はるゝなり。さらば痛解機密とい何の謂ぞや。曰く、我正教會の理解よれば、この機密は有罪なる靈魂の治療よして、神靈的生活の内部の作用なり。即、衷心より諸罪を承け認め、良心を安らかよし、ハリストスの十字架の其記号は痛悔者の眼前に置かるの力にて靈魂と神との和睦することなり。されど毀損せる煩瑣主義の理解よれば、有罪なる人の上に於ける結果と裁判との外部の動行なりと想はる。されば、羅馬教會の司祭ハ、認罪が時として極めて些細なる探究よ、秘密審査よ、宗教裁判的鞫問よ轉ぶることあるは、この叮嚀を以て、痛悔者の如何なる罪を

何時に如何なる起因よりて如何なる事情ありて犯し、かを探究し、
 さて生教よりて能々より得たる權を以て、痛悔者の承け認めし諸罪
 の賠償を要するはどに於て、ハリストス神母及其他諸聖人の功勞を
 痛悔者も賦與す祈禱中に言ひ顯さるゝが如し

痛解機密に附きて、正教會の解する所と、羅馬教會の解する所との差異
 は希臘語と羅句語とよていへる此機密の名稱中にも見ゆ。希臘語のいはゆる *metania* は元と神靈上の内部の變更を表し、羅句語のいはゆる *Poenitentia* は罰金、裁判、處罰等外部の行事を表す。

され、羅馬教會の無報酬にて、痛解機密に於て諸罪を釋き、諸聖人の功
 勞を有罪なる人々に賦與するにあらざ、衷心より諸罪を悔改して司祭
 の前よまれを認むるのみにては諸罪の赦を得るは足らざとして、諸罪
 も相當する賠償をも促すなり。羅馬教の教義よれば、神の義判の相當

の賠償なくば諸罪を人に赦さざとす。これ、煩瑣主義の神學よれば、痛
 解機密に三の固有なる必要條款即 *Contritio* 罪を傷む *Confessio* 罪を認む *Satisfactio* 償の
 有る所以なり。然るも我正教會にては内心に諸罪を傷みて口よ
 之と認むることを課するの外、ハリストスよ於ける信と、ハリストスの
 仁慈——其會て全人間の諸罪の爲に神の義判に獻げ給へる救贖の獻
 身——よ於ける望とと課するも、人は既作罪の爲も如何なる賠償をも
 自ら神に獻ぐることを得せと教ふるなり。
 羅馬教會の痛悔者も要求する諸罪の賠償とは、痛悔者の諸罪を承認し
 たる後に司祭が或る罪の代り、或る懲戒を課するの謂にして、我正教
 會もこれを用ふ。されど我正教會のいづゆる懲戒と、痛悔者自身の爲
 も有益なる神靈上の治療を意味する者にして、之を用ふるの錯乱せる
 痛悔者の良心を安らかまし、且痛悔者をして以後罪の習慣に勝ち易か

らしめんとてなり。時として、又、只に痛悔者一己の良心をのみならず、或る公然たる犯罪よて錯乱せる公衆徳義の感情をも安らかにせんとて、公然たる懲戒を課することあるも、是亦罪の賠償として、よあらざるなり。然るも羅馬教會にては、懲戒は恰も神のため必要なる罪の賠償として、神の賠償を人に受けせして其罪を赦すと得ざるが如き意味を附す。さては彼教會の懲戒に、人の既作罪を罰するの量多くして、罪人を矯正するの量少し。是懲戒は罪の代りの必需なる賠償として、必ず各痛悔者に課すべき者なり、又其重みと表認せられたる諸罪の重みとは綿密に相應せざるべからざり、彼教會の説く所以なり。さらば、人若し其生存中に、己が作せる各罪の代りに懲戒を成就し賠償を致すことを果さざりせば如何。曰く、人の死よて後賠償を神の義判よ致すの方法あるなり。これが爲に、死後の生活よ煉獄(purgatorium)と稱

せらるるものあり。煉獄とは、諸罪を悔いしも地上に於て罪の賠償を神に致すことを果さざりし人々、知らざりしにより忘れしよより若くは或る外來の故障よより、これありども永久地獄よ遣さるゝよ及びせざりとしてこれありては直よ天國よ通さるべくもあらざる、或る些細の罪の悔改を果さざりし死者の靈魂の置かるゝ所にして、天國と地獄との中間なる特別の場所若くは地位なり。死者の靈魂は若干日、若干月、若干年又は數千年の間諸罪の輕重數量よよりて差あり此所よ在りて種々の苦難を受け、以て司祭の前に表認せざりし或る些細の諸罪を淨められ、且生存中よ諸罪を悔改せしも、其懲戒の成就を果さざりし、重き諸罪の賠償をも神に獻ぐることを得るなり。かくて各靈魂の課せられたる此苦難の期満てれば、靈魂は煉獄より天國に移るべし。假令人靈は極めて熱切に痛悔したりとも、神の義判は既作の諸罪及未遂の諸懲戒相當に人の靈魂を

苦めせして、その諸罪を赦して直ち天國に通ずことを得せど。是れ羅馬教の教ふる所なり。夫れこの諸理解の如何ばかり鄙陋にして基督教の精神と相應せざるかは、故らよ此といふの要なし。聖書は毫も煉獄の事と云はせ、又此想考は夙も古異教の妄信より移りて羅馬教の神學に入り、中世代に至りて、羅馬教會の神品が貪權慕利を圖りて、人民を恐れじめん爲に、殊に熱心して傳へしものなればなり。さらば、人の生存中に懲戒の重みを軽くし、死後煉獄の苦難の期限を減し得るの方法、換言せば、諸罪に代ふる必需の賠償を神に致さずして天國に入るの方法なきか。曰く、何事も天國の鑰と手にする能く三人の關するなり。神は人を慈むによりて、痛解機密外に於ても諸聖人の過分の功勞を只に生ける者のみならず、死もし罪人にも賦與する無限の權を教會の首領たる能々に賜へり。かゝれば能々は汲み盡されぬ過分

聖行の寶藏を司配し、有罪の人々を安らかにせん爲に之を利用して、赦宥(Indulgentio)と呼ぶる者を得ふることを得。生者此赦宥を得ば、これによりて或る罪に代ふる懲戒と成就し賠償を致すの義務より自由とせられ、死者之を得ば、これによりて煉獄の受難期限を短縮せらるべし。赦宥は神の太仁慈により、能々の謙遜によりて、無報酬にて、又は聖地、羅馬旅行の如き敬虔なる所行、公衆を益する事業、教會と利し若くは能々を益せんとの或る功勞及奉納等の故を以て、與へらるゝことを得。赦宥には人の一生と総ての罪とに効力を及ぼす完全の赦宥と、若干日若くは若干年の間効力と有する不完全の赦宥との二種ありて、別に又大赦宥あり。羅馬教會は於て盛に「ユビレイ」の祝祭を執行する時、新能々を選擧する時、教會の或る重要なる事業若くは教會の特別なる危難に際する時、十字軍、全地公會、入聖の時等の如き或る特別の場合に際して、全羅

馬教世界、若くは全一國若くは在羅馬の全基督徒に若干時の間、下賜せらる。凡て此等の赦宥を得るは直に能々よりし、若くは大カルヂナル釋罪官と經、若くは主教及其他の神品を經、若くは能々の權杖を捫るよあり。さて又羅馬教國は特權を有する聖堂、小堂、聖臺、聖像あり。有志者の隨意より其前より祈禱して若干日の赦宥を得可く、羅馬は於て成聖せられたる或る種類の小聖像、念珠、小十字架及之より等しき物によりては赦宥の恩寵を得可し。

以上より陳べし所の、これ羅馬教會の毀損せし神の義判と、人々の救贖との虚偽なる理解の大意なり。抑、斯かる教義は、いかに神の愛の觀念と、聖書の教ふる所と、正しき徳義の感情の要求とに反言するか。此等の理解は或る人々を妄信と自欺とよ、或る人々を悲哀と失望とに置き、いかに有害なる影響を人々の徳義上に及ぼし得るか。又此教義は如何なる非常の權を神品に與へ、且斯かる權の使用のいかん恐るべき弊害に陥り得るか。是皆歴史上よりして自ら明かき且詳かなり。

第七章 羅馬教會の奉神禮の特点

羅馬教會の奉神禮を正教會の奉神禮に比すれば、其特点少くもせせ。その中より或る特点の、一地方教會の風習を表するよ過ぎせし、毫も正教の促すところよ反かざるも、他の或る特点、殊に彼教會の東教會より分離せし後、即中世代に當りて彼の教會に現れたる者の如き、基督教の正格なる禮儀を毀損し、宗教的の理解と感情との鄙陋、若くは古教會の傳に對する不注意、即不敬を表彰するものよして、其他の風習禮儀、中世代より當りて神品權と慕利との計算上よりして教會の使用に容れられしものなり。

概して正教會の奉神禮に比すれば、羅馬教會の奉神禮の、神靈上の高尚

内部の意味、宗教的の嚴格、古傳の純潔も乏しく、感情的世俗的の性質多くして、^{みえ}外見を慮りて感觸も意を用ふることを^{すくま}勘からざれば、その智識も於けるの感化より、想像も於けるの感化多し。聖堂の建築上も於て、一般も羅馬教會の正教會も異なる、其主部の西方も在ることなり。彼教徒の私祈禱の際にも、東も向ひて西に向ふの風習を有す。これ基督教の都たる羅馬も、基督教會の首領たる^{パパス}花々との西方にあるよるや明けしされど公私兩祈禱の時、特も東に向ふを例とする。我正教の風習、其基礎更も多し。古より基督教の東を光の象となし、聖史の重要な諸事件の東に起り、いと尊き聖なる信仰の諸記念の今尙東もありて、古代教會の教師^大も東に向ひて祈禱する風習を使徒の傳を名けたり。しかのみならず、今尙羅馬も存するいと古き或る諸聖堂さへ證するが如く、古の西方もても東方と首なる方向と

して聖堂を建てしなり。西教會の聖堂の諸方、西南北の三方も、若干の聖なる寶座を建つることを許可す。さて又同一時に、一寶座に面する人々の等しく無血祭を執行する他の寶座と背にして立つことども遭遇し得べし。西教會の聖堂の^{イコンスタ}聖障も無く寶座の覆ひも無きが故も、其寶座の我正教會も於けるよりも參詣者の眼も^{あは}陽なり。これのみにては聖堂も於ける敬心の彼も少きを認め得べし。又彼教會もでの教會の役者のみならず、俗男俗女も寶座も近づき、其^{あた}周邊を歩みて之も依凭することあり。羅馬教會の聖堂に、聖祭品を備ふる特別の祭壇なし。我正教會の聖堂に、いづれも聖祭品に於ける特別の敬心を表し且之を備ふるが爲も特別の祭壇あり。教會の古法もよりて、聖役者のみ之に觸ることを許さる。

西教會の聖堂に聖障のなきは、基督教的の思想と感情との爲に重大なる損耗なり。我正教會の聖堂にては、聖障の天上地上兩教會交通の高尙なる觀念と、諸聖人の神前より在りて我等の爲にする仲保とのいと良き表様と爲し、又その諸聖人の畫像にて、基督徒の眼界と感情とに、徳義上の教訓の高尙なる鑑を得せしむ。

羅馬教會の聖堂に於て聖像を用ひ之を敬ふこと、猶我正教會に於てするが如きも、西方即以太利風の畫と東方即以ウザンテ、ヤ風の畫との其性質を異にするなり。西方の聖像畫はその外形頗る艶美なるも、神靈上の高尙と基督教的觀念の嚴格とに乏しくして、畫の想像と自由とせしむること我教會より越ゆか、れば、西方の畫工の地上に在らざる諸聖人の世界を像るに、時として凡てこの世に属する嗜好情況を寫して、感覺し得べき地上の世界に甚彷彿せる者となすことあり。

西教會の聖像畫の外は、摸像彫像を用ふ。摸像は古異教世界の感覺教にも用ひられたりしかど、基督教の教旨と其奉神禮との高尙なる意義に相當すること少しとて、我教會の之を用ひざり。さて摸像の使用は羅馬教會に於て、時としての神品輩の故意なる放恣と濫用との利器となりて、殊に基督徒の思想と感情との虚偽なる方向を取るに助けしこと少からざりき。

羅馬教會の聖堂にては、奉神禮の際、參詣者より坐することと許す。た、福音書を讀む時、祭品を獻ぐる時、聖務者の人民より降福する時等の如き、殊に重要な際のみ立つる要するされど西教會の教師テルよりアエの證明する所によれば、三世紀に當りて、奉神禮の際も坐する風習の始めて西教會に現れし時、かの教會の嚴重に之を非難じたりしなり。ざるをまして奉神禮の頗る短くせられたる現時に於ては、斯かる風習を許すの要更少し。

羅馬教會の聖堂又は奉神禮の際に坐せんための圈椅と長榻とありて、時々席料を取りて之を貸與す。羅馬教會の聖堂に坐せんための圈椅と長榻とありて、時々席料を取りて之を貸與す。軍人の帽を冠り、戎器を帯びたるまゝにて奉神禮に参り、時としての聖式にも與ることあり。このこれ外面上羅馬教會の奉神禮に一層の華美を呈するも、奉神禮の真正なる基督教的的精神に相應のしきものにあらざり。正羅馬教會の聖堂に祈禱する者が敬心を表様するにも、若干の差違あり。羅馬教會の聖堂にての十字と畫すること正教會より少きも、他の表様腰拜、仰視、擧手、拊膺を用ふることを反りて多し。これ皆基督教的敬畏の感情に適當する表様なるも、十字の表様の他の表様よりも一層深き意味を有するものなり。されば使徒の時より連綿として古教會も殊之を尊用せり。

羅馬教徒の、自身は十字を畫するは五指を用ひて五指を用ひ、左の肩に畫して後右の肩に畫すれば、正教徒の五指を用ふるは、神の三位にして一體なること、ハリストスに二性ありて合一せること、ハの高尙なる定理を表様すなれば、羅馬教徒がハリストスの五箇所の傷に因みて五指を用ふるよりも、深き意味を有するなり。又我等が十字を畫するときは右の肩を先とするは、人の生活上勤務上に於ても右手の左手よりも重きを以てなり。中世代の頃西教會は何處の聖堂に於て奉神禮を執行するは、傍聴者時としての亦聖務者も解し得ぬ羅甸の死語を用ひたり。その當時西方の神品が、何處に於ても一地方國民教會の獨立を壓して、いと嚴格なる外面上の教會唯一と固くせんことに力を尽し、又一層多く人民の上は、權を得んとて、故意に人民を宗教に關して無智ならしめんとせしむる

るなり。されば、羅句語を解せざる人民等、自國の活語にて奉神禮を執
行せんことを促し、十六世紀のトリデント公會に於てさへ棄却せ
られたり。ざるを近世に至りてかの教會の止むことを得せしめて、聖祈禱
讚美歌を朗讀唱歌するも、一地方の邦語を用ふることを許したるも、全
尙何處にても、奉神禮の重要なる部分の羅句語を用ひ、且之を聖語と
す。抑奉神禮を大聲に執行すべく、又かく之を執行するは、堂に在る者の
解し得んためなれば、我東教會は常に各基督教民は、其國語にて奉神禮
を執行することを許せり。

中世代より羅馬教會の奉神禮は、風琴其他の樂器を用ふることを、な
れり。それ舊約なる猶太の奉神禮に於て、宗教的感情を鼓舞せん爲に用
ひられし奏樂の、唱歌の如くは、基督教的觀念の生ける當然の表様た
るを得せとて、古代の基督教會を斥けられたるを、まして、間羅馬教會の

聖堂に於て許すが如く、世俗の歌舞曲の奏樂を教會に用ふるの、不當
なるの一層のことなりかし。

西教會の唱歌の東教會の唱歌に異なるは、我教會の唱歌の如き、安靜、深
意、威嚴、嚴肅なきあり。さて彼唱歌に、聖歌の旨意に相當することを慮
るよりも、外面の高手なるに感觸を慮ること多くして、其精神の祈
禱する心地を一にするよりも、地上の人情の波瀾を多く言ひ顯す。

教會の成規、即教會奉事の組織——奉神禮に用ふる祈禱聖歌儀式等に
於ては、西教會の東教會に異なるもの甚だ多し、固より、その中にも敬ふ
べき古代より出で、高尚なる基督教的的精神を以て秀づるものあれば、概
して西方の奉神禮に、新設、弄巧、増飾は、更にもいはせ、見は、教會的の傾
向ならざるだも、少からざ。其最重き奉神禮たる聖體禮儀も、これを東教
會に比すれば、基督教古代の元型タイプより傾けること、更に遠し。殊に有害に

して非難せらるべきの、中世代の頃同一司祭の同一日は同一寶座に於て、若干度の聖體禮儀を執行し、又若干司祭の同一時は若干寶座に於て服事すると、彼教會の許し、とにして、一方にいたく人民が聖なる奉事を敬ふ心を傷め、一方にいたくなる濫用の起因と神品等も與へしものなり。さて神品等の利を貪らんとす、如何ばかりか富める基督徒の聖堂に於て公衆の爲に執行せらるる聖體禮儀に詣つとも、これよての猶不充分なれば、各自身の平康と死後との爲に特別の奉事を囑託するを要すとの如き、理解を民間に傳へんことに尽力したりしかば、是に於て諸聖堂の多數の寶座立てられ、唱歌風琴と伴ひて、大寶座に於て大聲に執行せらるる重なる聖體禮儀Mass cantataの外、別な一部の人の請願囑託よりて、他の寶座に於て他の聖體禮儀文を黙誦しつゝ、至聖機密を執行するとMissae solaeも許されたり。然るもこの私の聖體禮儀の極めて迅

速輕忽な且弄聖してさへ執行せられしかば、人民より受くる諸尊敬を滅却して、遂に彼教會の諸聖體禮儀に對する執拗嘲弄を波羅提士Protestant教徒に招きぬ。かくて後世に至りて此濫用の大なる制限せられしかば、今尙かの教會の司祭等の、少くも諸大祭日に一日若干度の聖體禮儀に服事するよとを許さる。さての亦かく領聖するよとをも許さるゝなり。されど、おの決して聖なる奉事と、至聖なる機密とに於ける敬心を強むる力ある者よのあらし。聖體禮儀と朝夕の奉事との外なる、諸奉事も附きて言へば下の如し。俗人の通常殆ど全く之に詣づるよとなく、其執行あるをも知らざれば、其執行のため聖務者の好意と良心とを歸するに過ぎぬ。羅馬教會の正教會よなき祭日多し。諸聖人の中にて殊に尊崇せらるる、西方一地方教會の人々、及數多き後世の人々なるよと勿論よして「エズラ」イットの植

礎者イグナチオ、ロイオラ、大宗教裁判官トルクウエマダ及アルフェス、南西部ロシヤの正教審逐者イオサフ、下クシツエウチ虚談に属するキエシ及ボリシヤの聖人ヤン、チボムク等も其數中にあり。救世主及聖母を尊榮する爲に設けられたる祭日中に、弄巧偏向なるものあり。一例を擧げれば、基督の體の祭、耶穌の心の祭等これなり。羅馬教會の聖堂内外に於て執行する聖行聖式の甚多けれども、そも亦正しき宗教思想及感情を起すよりの感觸に利するを多む。主の受難週間及「パスカ」祭に執行せらるる聖式多くなり然りとす。第八章の機密の執行上は於て羅馬教會の古傳は遠かれること強し。羅馬教會の既作の行事よりして (ex opere operato) 機密の効ありとの教義は、羅馬教會の義理の正しきものなるを以て、羅馬教會の機密の効ありとす。羅馬教會が七件機密を承け認むること、我教會の如く、其之に附する

價值も我教會の如きも、機密執行上は於て、東西兩教會の間は著しき差違あるなり。概して羅馬教會の何の機密に於ても、機密執行は服事する者の人稱は價值を附すること多きに過ぐ。我教會よりの機密執行は服事する聖務者の、神の僕(某)洗セラレ、賜聖セラレ、冠セラレといひ、彼教會よりの我爾ニ洗テ授ク、我汝ニ膏スといふ。かゝれば我正教會の式は一層適當な一層善良な機密の力の可祭の人稱によるにあらせして神の恩寵によるとの意を表様するものなり。古代教會の尊き教師の一たる福アウグスチンも、嘗て羅馬教會の式に反對していへり。カリストス、ハヤグダリヤ、ス罪ヲ赦シツ、(路加七) 我爾ニ罪ヲ赦スト、宣ハズシテ爾ニ罪赦ナルト宣ヒ、サテ謙遜ノ例ヲ示シ給ヒ、ソハワレ義トナシ、ワレ聖ニシ、ソレ罪ヲ赦スナドイフ驕傲ナル人々ノ、後世ニ至リテ現レントスルヲ先

見シ給ヒシ故ナリト。

聖洗 彼我教會共ニ洗禮 機密ニ於て正加兩教會の差違する至要の点

我教會の三たび領洗者ト水に浸没せしめて之を執行し、彼の教會の水を濯ぎて執行するあり、されば我聖洗式の彼教會より一層善くこの機密の本旨——聖洗に於て人の肉に属する罪なる生活の爲に死して、神に属する恩寵の生活の爲に更生し、且ハリストスと共に葬られて、共に甦る——を表徴するものなり。蓋ハリストスも浸没して聖洗を受け給ひ、基督教初代の傳道者等もかくして信徒の上ニ聖洗を行ひたり。固より時としてハ撒水式灌水式の許されしことあるも、そのたゞ特別の場合に於て——難病者の爲、異教徒に監視せらるゝ者の爲に止むを得ざる場合に行ふのみ、但教會の此等の式を稍、完全なるが如き者とし、灌水式を以て洗せられたる者を聖務者の階級に叙するとを許さざりし

なり。西教會も古くハ浸没式を用ひしこと、彼教會の或る古聖堂に現存

する洗禮室の證明するが如し。しかのみならず古代に於て聖洗をいへ

る希臘語の Βαπτισμός Baptismos も、羅句語の Baptisma Baptisma も共に浸没の意義なり。ざるを

近世に至りて灌水式の西教會も容れられしハ、其聖務者に便利多きが故なり。

傳膏機密 羅句語にて confirmatio、といふ彼 西教會にてハ主教 彼教會にて

は、のみ之を執行し、嬰兒の上より執行せられし、して成年の上ニ執行せられ、頤のみを膏せらるゝも、其他の感覺動作の諸機關、即、眼、鼻、耳、口、胸、手、足の、聖膏を以て印せられざるなり。抑、かゝる風習の固く西方に立ちたるハ、漸次こゝに及びしにて、古くハ西方にてハ司祭等は受洗兒の眼、口、胸手に膏するの權を有したりしも、或る地方にてハ主教職と特尊せん爲よ、頤も膏することを主教に歸するに至れり。かくて司祭職の傳膏ハ漸

其價值を民目に失ひて、主教職の傳膏の盛なる儀式を以て飾られ、遂よの専らこれのみ機密の價值と附せらるゝに至りしかば、眼、耳、胸に膏することの廢せられて、たゞ額に膏することのみを守られける。是より於て、傳膏機密を聖洗機密より分離して成年者の上より施行するの必要となりぬ。夫れ、大なる主教部のエペスコピヤの主教の各嬰兒の洗禮あることと、之を隨ひことを得ざるが故に、其管下を巡廻するの際、或る町又の或る村に止まりて、一次は其地の未だ膏せられざる住民に膏すること定めじが、後之より高嚴なる價值を附せんとして、主は此機密に於ても已が恩寵を年輪をも定め給はざりしより係らず此機密に近くことを得ざるやの年輪を定め、此機密を領くるより特別の準備を促すに至れり。かくてこれよりして實に多くの濫用を生じ、且主教巡廻の數ならざると、偶然なる種々の事情とよりよかりて、今尙多くの羅馬教徒の傳膏を領せしめて老耄するあり、死亡するあり。

或の自己の膏せられたりや否やをだに知らざるものあり。
中世代の或る傳膏機密を執行するに、尙一の頗る奇怪なる風習西方に
行はれ、主教は機密を執行して後に軽く被膏者の頬を摸ちたり。是、被膏者
に於ける父の愛の表様として、被膏者を順從せしめ、慈愛と信實は、其の爲に
行はれしと云ふ。西方の或る著述家爲らば、此風習は騎士職の式より採れる
なり。
 聖體機密に此機密に附きて西教會の東教會に遠かれる。至要の点は、神品職の階級と有せざる全クリスタミアンにより、聖體は主の聖血を領くるを剽奪したるにあり。これ聖體機密を設けるとき、皆之ヲ飲ムべし馬太二十四章と宣へる主の言は、眞反對となすものにして、その西教會に容れられし、彼教會の神品の無識專横なりし時世たる十三世紀の頃にして、領聖を以て一層俗人と神品との差別を表さんとの拙策に

出でしなり。抑、其の濫用の西教會自身の神學者等例ハ、マフホマ、アクリウ、ナト、大アリベルトに非難せられ、又或る地方例ハ、パチエヤに於て、十五世紀に當りて羅馬教會に對する怨言と人民の騒乱とを招きぬ。時に彼教會のパチエヤの公會に於て、餅酒の領聖をパチエヤ人パチエヤは許可するを、止むを得ざるまじき認めたりしも、其他の全羅馬教徒の爲より一種の領聖を固守せり。かパチエヤ此濫用のパチエヤ公會にも確定せられて、今日に至れり。羅馬教會の神學者等の此濫用を辨護せんとして、若干の遺辭を考へ出しぬ。例ハ、俗人ニハ別ニ聖血ヲ領クルノ必用ナシ、体ノ與ヘラル、所ニハ血モ與ヘラルレバナリ、といふ。さらば、かゝる判断の何故は俗人の爲は價値を有するも、神品に應用せられざるか。又イ、ス、ハリストスの至潔の体を一種、施生の血を別種となして之を門徒に賜ひつゝ、体中常に血あるを知り給ひざりしか。彼等又或の領聖者ノ粗忽ニヨリテ、聖爵ハ覆リ

易々聖血ハ洩レ易シ、どの如き鄙陋の遺辭を陳ぶ。されど或る人々の粗忽の故を以て、救世主の直接の遺言に反きて聖血を全俗人より奪ふの豈許容すべきよとならんや。

かくて又順次に、他の濫用も彼教會に起りたり。それ小兒の硬き食物たる麵包を得食せざれば、教會の古くより之より一の聖血をのみ領けしむ。かゝれば西教會の聖血の承領と俗人より奪ひて、小兒にハ全を領聖を失ひしめたり。聖爵の始めて俗人より奪はるゝや、或る司祭等の小兒の領聖を辭して、其両親と激せしめざらん爲は、聖血の代りよ平常の酒を小兒と與へしも、かゝる欺騙の主教等の禁せるとあるとなりぬ。羅馬教會の神學者等の此濫用の爲にも、虚偽なる若干の基礎を辯護とを得るに力を盡せり。例ハ、小兒ハ斯克モ大ナル機密ヲ領クルニ任ヘズ、——彼等ハ相當ノ認識ト恭敬トヲ以テ之ヲ領クルコトヲ得ズ、といふ。されど

ハリストスの躬親ら孩提ノ我ニ就クヲ容ノ之ヲ禁ムル勿レト宣ヒ且
 彼等を成年者の手本として神國の後嗣者と名づけ給ひぬ。馬可十九章路
加十且夫れ成年者の中誰か敢て我の大なる資格を以て領聖近き且
 我の此機密を解すること、孩提超ゆといふ者やハある。小兒ハ認識し
 つゝ聖洗機密準備し且領洗するとき自ら誓約を爲す能ハざるも
 彼教會以して若し、彼等の聖洗機密於て神の恩寵を受け得るを許容
 せんよハなきが不認識を以て、小兒の傳膏聖體兩機密於て恩寵を受
 くるの故障となすべけん。
 西教會ハ聖血を俗スを奪ひたるが上又古傳ハ反きて聖體用の餅質
 とも變ト我教會の如く有酵の潔淨なる白餅を用ふることをせせして、
 特別の方法を以て製したる除酵の餅を用ふ。此新設の既ハ十一世紀ハ
 嘗りて西教會ハ固く立てりしも、如何なる目的の爲ハし、如何なる基礎

はよりて許容せられしかハ定かならざ。抑、ハリストスの秘密の晚餐を
 行ひ給ひしハ「パスハ」祭期の前以して、イウヂヤ人の除酵餅を用ふるハ
 「パスハ」祭期の第二日ハ始まりしなれば、ハリストスの通常の有酵餅を
 用ひて聖體を其門徒ハ賜へりと、思考するの基本あるなり。且福音書上
 聖體用の餅を記すハ用ひらるハ希臘のartos羅旬のfermentumなる語ハ、
 元ト釀カされたる酸味ある、膨張せる、通常の餅の義あるもの以して、彼除
 酵餅ハ希臘語以て一名をazimosといふ。中世代ハ當りて、希臘人が羅旬
 人をアツミートトと名けしハこの故なり。古くハ信徒の聖堂ハ献納せし
 通常の祭品希臘語のprosfora中より、聖體用の餅を選びしなれば、古代の
 聖體禮儀ハ皆預備外此祭品を準備する特別の部分ありて、特別の
 式ハ「プロスコミディア」も定まれり。されば、古代教會ハ於ても聖體機密
 有酵餅を用ひしこと疑なきなり。而して除酵餅ハ古くハ教會より分

離せし或る小派のみ用ひられしも、第二世紀の「エウイオニト派」は殊に舊約の儀式を慕ひて之を用ひ、ブルメ紀ニヤの教會も第七世正教會の排斥非難せられたり。かくて又除酵餅の使用の西教會を古傳に於ける或る分離を誘ひたり。除酵餅の聖體禮儀に際して特別の準備を要せざれば、聖體禮儀の或る一部分——「プロスコミヂヤ」の全く西方を失せて、彼地の基督徒の、東方に於てかくばかり敬愛せらるる風習——「ハリストスの聖なる獻祭の前」に立ちて、天上地上の全教會のため、生者死者のため、祈禱を獻げ、又生者の壯健のため、死者の記憶として、抜き取られたる祭品各片の、聖爵中に入りて洗はるゝが如く、ハリストスの聖血にて己が愛する人々の罪の洗はるゝを禱ふこと、恰も基督の十字架の前を在るが如きを失ひたり。

俗人にして領聖せんと欲する者あるとき、彼教會の司祭の己の承領

せんとする首餅の外、更に又各承領者の爲に稍小き除酵餅を聖とすれども、是又眞に古傳と聖體的獻祭の一なること、の理解と背反するものなり。我東教會の聖體禮儀にて、使徒の傳よりて諸人皆一の餅より領聖す。これ深奥なる定理上徳義上の價值を有するなり。使徒パウルの言によれば、我等の皆一餅より領聖しつゝ、ハリストスと一體となるなり。哥林多前書十ノ十七亦一餅より承領して、我等のハリストスと合一し、又吾人相互に合一することの高尚なる意味の、聖大ワシリイの聖體禮儀を誦する祈禱文の一にも見ゆ。

俗人の領聖執行も、西教會の風の全く適當なるにあらざれば、彼教會にて我教會の如く、聖爵を恭敬して俗人の之に近く、いあらざして、司祭自ら除酵餅を捧げて各人近くなり。さて中世代の、能々の領聖するにすぎ、極めて不當なる風習西方に行はれたり。能々の聖堂の中央なる法

座に坐し「カルヤナル」に膝きて之に除酵餅と聖爵とを捧げ「カルヤナル」大補祭の葩々の領聖するに先ちて、除酵餅と聖爵とを嘗みざるべからざりき。さるの第十一世紀に當りて葩々ウクトル二世の遭遇せしが如く、羅馬の傳葩々の領聖して毒殺せらるゝとあらんを危みてなり。羅馬教會の諸機密を執行授與する方法上は於て古傳に遠かれるのみならずして、諸機密の能力と有効とに於ける見解も、或る特点を有するなり。それ諸機密の能力と有効との諸機密を執行承領する人々の資格と心地とよよるゝをあらせして、無報酬にて己が恩賜を人々へ與へ給ふ神の恩寵よよるとの正しき意義よりして、彼教會の神學者等の極端誇大を走りて、毫も執行者及承領者の性質と心地とは關らざりて、専ら之を諸機密執行の外部の方法儀式に歸したり。故に亦其實地上にも極端起りて、若し司祭の何れの所にか於て、假令異教の未洗兒を欺

きてなりとも、父子に聖神トノ名ニ依リテとの言を誦して、其額に聖水を塗りたらんもの、其嬰兒の既に受洗したる基督徒として算へられざるべからき。若し又司祭の何れの所にか於て、たゞは敬心を以てせざるのみならず、直接に弄聖しつゝなりとも、取リテ之ヲ食へ云々の言を誦して餅酒を降福したらんものに、其餅酒の既にパリストスの体血として算へられざるべからき。とするに至れり。これ諸機密の能力及有効の諸機密執行の方法其物よよる ex opere operato の煩瑣主義の極端なる所説なり。さて此極端の世人の知れるが如く、後世に至りて波羅提士丹教徒が、全く機密の恩寵力を排斥し、若くは少くも之を機密執行者及承領者の心地に、全く關する物とするの起因となりぬ。

第九章 羅馬教會の教會を管理する組織の特点

中世代の西教會の政治上の傾向及專制的の精神の、其管理上の組織に

も映られたれば、此にも古教會の定例制度に戻れる者多かり。彼教會は於て第一に注意を促す者の、神品と俗人との極端なる區別なり。かの教會よての、教會の高等權と教會の生活に於ける有意有力の關係とを、獨り神品にのみ歸して、人民の恰も死物の集會、無言の牧群のごとく、萬事唯々として己が牧者に信を置きて、これに服従するの義務あるものなりとす。斯かれば、人民のたゞは會事と興り、又の信仰上の問題を判斷するとのみならず、聖書を讀むことをだも禁せられ、奉神禮儀執行の際より、奉神禮は用ひらるゝ言語を解し得せして、第無意識として之よ興るのみ、聖體機密は於ての、神品と俗人との間、甚しき限界ありて、神品輩のハリストスの體血を承領し得るも、俗人の體のみを承領し得るなり。固より神俗間の專制的關係の、後世に至りて實地上大に制限せられしといへ、其根本の元型たる、神品の人民に於けること猶教會

の生活は對して無意無力なる群集に於けるが如き、驕傲なる見解の彼教徒間も存することの、今尙昔日の如し。抑、彼教會の神階の主教、司祭、補祭、三級の古制を存すれども、それが上より層高尚なる——古くの價値なかりし成規官職を立つ。カナルデナル「ナリトマヌ」レガート「ヌンチヤ」是なり。「カナルデナル」とい、元と羅馬主教座の神品として、葩々の議事は參與し、教會の政治上は於て葩々を輔佐する主教、司祭、補祭の名稱なれども、尊榮の爲よ、地方教會の長主教——佛のバリス塊のウシナ英のケンテルベライ等の主教も授けらる。カナルデナルの員數の前より四十名までなりしかど、今の七十名を超ゆ。此職の殊は昇進せしむ、十一世紀以後は葩々を撰被撰の特權の、此職員は歸せしこのかたなり。該員の教侯と呼ばれ、其職章として特別の制服赤キマを着用し、特別の尊敬を受け、華美

なる生計を爲す例へば世の王侯、主教エписコプ、総主教パトリアルフといへども、只「カルチカ」主教の前よのみならず「カルチナル」補祭ディアコンの前よも腰拜せざるべからざりとなり。さて其負擔する職掌如何といふは、其職掌の教事に關するより、寧ろ世事に關するより多きに數なり。羅馬は在りての外務官、警視官、財政官の任を負擔し、其他の國々ありても教務者といわれんより、國務者といひるべき者として現るゝと少しとせざ。リシエリヨ、マザリシヤシエリシエリシヤ、ルベロン、ロメチス、其他

「ナターマス」の一地方一國民教會の長主教の稱として、其教會の高等執政者と認めらるべき者なるも、獨立の總主教パトリアルフの如くたるよりあらざりて、全權を委ねられたる葩々の代表者たるなり。故に此職に撰定せらるる者カトリックの *palium* 大主教のなる者を葩々に受く。抑此職の殊に昇進せしむる九世紀以來なり。さるの中世代に當りて葩々が「ナターマス」を立て、さて

一地方一國民の教會を己が管下に引き寄せて、己が權下は服せしめんとしたるは因りしなり。當時の此「ナターマス」も葩々と同し、只は神靈的治者たるのみならず、王侯の特權を有して王侯の世計を爲す、世俗の縣治者として現れしことも多かりき。

葩々の地方教會は在りて葩々權を代表する「ナターマス」あるをも足れり。とせしめて、一層嚴密に諸會の情態を監察し、諸會を起れる事項を裁決せん爲し、更に至上の全權被委任者を派遣するの風習を起せり。之を使徒座ノ使節legati a latere apostolico といふ。さて此職に任せられし者、たとひ僅に補祭の階級を占むとも、其國の高等執政者の一、神靈的世俗的を問ひ、皆之に至上の尊敬と唯々の服従とを表するの義務ありとす。

諸國派遣の全權者に、教會上の囑托よりも政治上の囑托多くして、國王と盟約を締結するが如き際、葩々使節の資格を帯びて王宮に駐

在する時の之を「*ノンチヤ*」nonatus 即使節と稱す。斯る時の其職務を行ふも、全
 外交官の特權と手段とを利用することを得。此職員は羅馬宮殿の神靈
 的役員及世俗的役員中より推舉せらるゝなり。
 范々の自身を止に羅馬教を受けし國々のみならず、羅馬教會に屬せざ
 る國々及基督教の毫も傳へらざる國々さへ、高等領者と呼びつゝ、斯
 かる國々の爲にも神靈上の統治者と羅馬と置く。有たる國々も、パピス所
 信じて、されば實に羅馬にの范々權を承け認めざる東教會の爲の總生
 教のみならず、異教國の爲の主教 episcopi in partibus infidelium をこへ設けあるなり。
 さて、彼教會の神品階級と其相互の關係とと通して、最嚴重なる中央
 集權及規律行ゆる。神品下級員の萬事唯々として上級員に服従するの
 其義務として、教會政治の綱緯の、一は皆全教會の上は專制權を有する
 范々の掌中と湊合するなり。

彼教會よての神職を脱するの全く不可能なりとす。即たとひ斷乎とし
 て不當なる者なりとも、在職を望まざる者なりとも、其受けし叙聖の恩
 寵の世々に削除せられせとなり。されば彼教會よての叙聖神職は叙す
 るの權なる者とは執行の權なる者とは區別するが故に、神職の實用を失
 へる者——高等權の釋く所とならせして、或る聖事を行ふの權を有
 せざる者となるを得。斯かれば、彼教會の神品下級員の運命は、偏り上級
 員の掌中よあるなり。此事たる、彼教會外部の目的の爲より頗る有益に
 して、其神品間も嚴重なる規律を維持し、彼教會の利益に服事する輩を
 其神品間に養成すべきも、教衆間の正しき兄弟的關係と眞實と自由
 との壓抑を伴ふ者なり。
 かくて又、西教會のなほも神品間も嚴重なる規律を行われしめ、さて愈
 教會の利益も服事せしめんとて、無妻を全神品の義務と定めたり。抑、神

品無妻の、一地方教會の風習として西方は傳へりそめし、夙に三四世紀よりのこととして、已に第一全地公會に於てこれを全教會に用ひんことを發言したる主教等の思ふは西教會の者ならんもありし、該公會にては、特別なる嚴肅的アスケチズムの召を蒙れるもあらずる全教衆の堪ふべきものにあらざりて、之を排斥したりしかど、其後も依然として西方の神品間も維持せられぬ。されば、是又全神品の義務とするが故にあらざり、第一地方の風習も因りしなり。ざるを十一世紀も當りてグリゴリー七世の位、カルデナル官たりし時、先づ葩々ニコライ二世アレクサンドル二世に、無妻を神品一般の義務たる法となさんことを勧め、次ぎて自ら葩々となりて強ひて之を全教會も布しきし、この一個人の自由を壓抑するものなれば、其神品間も大不平を招き、葩々に反對する公然の騷乱をも所々も醸かせり。然るにグリゴリー七世の鐵石の如き剛毅を以て、其事業を決行

せしかば、有妻の神品の離婚するか、さらば其職を辞せざるべからざるに至り、さて無妻の人々のみぞ神職も選ばれたる。この壓抑も出でし無妻の固より西方神品の徳義を進め、せして却かりて此時よりして不徳偽善の愈、其間に蔓延はたらしたりしかども、其葩々の政治上の目的に幸せしこと、疑ふべくもあらず。ざるは、家族を離れ社會との關係を斷ちし神品は、たゞ人民の要求も注意することと減さるゝあらんも、愈、専ら教會の利益に服事し得べければなり。斯くて又、西教會の専ら教會も服事する人々を、能すべき丈多く民間に得、且之も依りて己が勢力を民間も占しめんと目的を以て、特に修道職を羅馬教諸國も蔓延せしめんと勉めしかば、さしも是時に至るまで、東方の基督徒間の如くに、嚴肅的の傾向なかりし西方に、修道士の輩出するよと反かりて多きに至れり。されど、其修道職の當時既に東方修道職

の元型タイプより傾きて、修道士の純粹なる嚴肅アスケチスム的の傾向——冥想祈禱アサキも満足せしめて、身と多く實業上の目的スルツを委ねしかば、當初の學校の維持、慈善事業の設立、家政の良鑑ヨシカミと職業シゴトとを民間に傳ふると等の如き、實に社會を益する事業シヤクワクをなしたれども、後漸く會社風の狭き目的スルツを染みて、己が案出せる實業上の目的を以て、人民一般の利益と斷乎たる反對の地位チを立ち、且常に民間に流浪しつゝ、愈不徳と徒食とを流れしかば、オレゲンの人民の嫉惡輕蔑を招くに至りぬ。さるの亦修道士の諸党派オレゲンも分裂するを、彼教會の許容せしむるもよれるなり。抑五世紀より十一世紀に至るまでの西方に獨り「ベネディクト」の修道派——其盛時サカレタトキの頗る尊貴有益なりし修道派のみありしが、降りて十二世紀よりして、各其成規誓約、外見實業傾向を異にする「カルテヂアン」「カルメル」「ドミニカン」「フランシスカン」「アウグスチン」「ラザリス」「エズイト」等の諸党派オレゲン起りぬ。此

諸党派の何れも皆當初より高尙なる傾向を以て頗る嚴格な活動ハツドウしたりしかば、後幾何もなくして廢頹ヘイトし、放逸ハツタクし、徒食誣賴等オレゲンは慣習せり。殊トシ又其中は勢力を有したる或る党派オレゲン「ドミニカン」「フランシス」の如き、オレゲンの教導の下に於て愈、其政治上の方向オレゲンを染みて、人民の處生オレゲンに關涉し、國政をさへ左右オレゲンせんと圖り、又其神學上の著書オレゲンに於て、基督教の定理及徳義法を錯亂毀損し、オレゲンの其相互の爭論、競争と、其人民に於ける壓抑的の關係とオレゲンは由りて、自身に於ける修道職の理想、其物に於ける教會一般に於ける同情尊敬を民間に覆せり。然るに此に尙西方の修道職オレゲン編制上オレゲンに於て注意すべきものあり。各党派の互に其成規、誓約、傾向を種々オレゲンとするも、彼教會一般の精神オレゲンはよりて、嚴重に一の範々權に適合するとはなり。西方の修道士の東方オレゲンは異なりて、何所に在りても、地方教會の制御——其主教に服せしめて、己が高等の頭領、即羅馬オレゲンに在りて範

を直轄せらるる「ゲテラル」に属す。かゝれば、其地方教會の政治及神品
 を抵抗するも稀ならざるも、それが爲に葩々の葩々の勢力を諸國に擴め
 るも勉むる最忠の僕等を其中に有す。
 西方の修道職の、時々葩々の軍隊と稱す。されど中世代は當りて、彼教會
 の更なる眞の常備兵を置くことに盡力せん。彼十字軍の時世、即宗教上人民
 の殊に活動せる、教會的の傾向と政治的の傾向との太く混乱せる時世
 に當りて、武族イノフアンニト、タム、ア、リ、エ、ル、フ、ト、ン等をいふ。なる者起れ
 り。其黨員の軍兵の義務を負ひながら、無妻、教會服役等の修道的誓約
 を爲し、其頭領たる「グロスマイスタル」も、修道諸党派の「ゲテラル」と同
 く葩々の直轄する所なり。
 葩々の此武族を以て、到る所に己が勢力を張り、凡ての反對者を服従せ
 しむるの、屈強なる根據とせんとの望を懷きて、たゞは羅馬教を傳へ、不

信の徒を殲さんとして之を諸大洲に遣し、のみならず、歐洲中に在りて
 葩々に不服抵抗する者も向けても之を遣し、かど、此党の元と不規律
 として、教會の精神にも、現存諸國の自然の体制にも、合ひざりしかば、能
 く其勢力を久しくすることを得ざりき。さればこの設立は加特力教會
いたく神靈的(宗教的)の傾向と形体戰の教會尤も野鄙なる本來の一般の精
神を、さながらに頗る善く表樣せしものにぞありける。

後編 波羅提士丹教の教義及其諸會
第一章 波羅提士丹教開發の事情及這教一般の氣風
波羅提士丹教は羅馬教の不正と弊害とを招かれて、西方より出でたりと
い、彼が歴史上の解明辨護なれども、毀損なき正教の傳を距ること遠く
して開發したれば、純粹なる基督教の再興として現るゝことを得ざ
りしなり。抑、波羅提士丹教の植礎者たるリニエールツウヤングリイカリウ
ン等の才能あり且實直なりしも、尙未だ迷惑と人生の嗜慾とを脱せざ
ること遠き人々を以て、高等なる特別の任命と全權とを有せざるも、教
會の改革をもて己が事業とし、己が企圖せる事業を要する自然の準備
をも有せし、即己が敵對する煩瑣主義の理解の精神を養はれ、且羅馬教
の反對を立ちつゝ、之によりて己が所説を確めんと望み居たる聖書の

後編 波羅提士丹教の教義及其諸會

第一章 波羅提士丹教開發の事情及這教一般の氣風

波羅提士丹教は羅馬教の不正と弊害とを招かれて、西方より出でたりと
い、彼が歴史上の解明辨護なれども、毀損なき正教の傳を距ること遠く
して開發したれば、純粹なる基督教の再興として現るゝことを得ざ
りしなり。抑、波羅提士丹教の植礎者たるリニエールツウヤングリイカリウ
ン等の才能あり且實直なりしも、尙未だ迷惑と人生の嗜慾とを脱せざ
ること遠き人々を以て、高等なる特別の任命と全權とを有せざるも、教
會の改革をもて己が事業とし、己が企圖せる事業を要する自然の準備
をも有せし、即己が敵對する煩瑣主義の理解の精神を養はれ、且羅馬教
の反對を立ちつゝ、之によりて己が所説を確めんと望み居たる聖書の

確證をも、之に効^効ひてこそ己が新設の教會を構造せめと欲したる、古代教會史の識認をも有せし、毫釐の毀損なくして基督教の古傳を固守する教會——彼等に羅馬教會の煩瑣主義と同視せられ、今尙羅波兩教徒を敵視せらるゝ、東教會を知らざりき。なべて其嚮導者等は教會の改革を企てつゝ、己が希望する改革を如何すべきか、其如何なる境界に至りて止むべきか、付ての明白なる預想をだに有せし。己が反對者たる羅馬教會との急劇なる戰の裡、順次に自説を開發しつゝ、自身だも或は煩瑣主義の詭譎^{まじし}詭辯^{まじし}を繼はれ、又は激して羅馬教の迷惑に反對なる——同トく是不正偏見なる極端に陥りたり。かゝれば遂に其希望せし如く宗教上の基礎のみよりて其意見を開發するを得せし、其事業も全く宗教的の氣風ならざる別種の感激傾向も多く加はりしが、そも亦教會改革の運動に特殊の方向を與へざるべからざりき。かくて彼嚮

導者等ハ能々反對する戰旗を西方に揚げし、其旗下に集りたる者は多かりしかども、それは全く宗教的の感激によるものあらざりて、只管能々敵對せんとするものありしかば、愈かの改革をして純正眞直なる宗教的の道路より遠からしめて、其開發も不正の方向を與ふるを免れざりき。夫れ事情斯くの如くなりしかば、彼教のたゞ純粹眞正なる基督教の再興として西方に現れ得ざりしのみならず、嚴^厳考察を下されたる確乎一定の信條的教系とも現るゝことを得せし、遂に其一時に發生開發したる痕跡を有する教義、動搖不定誘惑撞着^{つづ}り満てらるゝ教義とこそ現れたれ。

第二章 波羅提士丹教の正羅兩教に於ける關係
波羅提士丹教徒の羅馬教會より出で、思ひを知らず其或る迷惑を保存せり。然り、聖神の父及子ヨリ發スとの教義の、聖書に基礎なきも、初代

の基督徒は知られざりしも、彼等の之を保存せり。之を保存しつゝ尙曰
 茲、我等の獨り聖書は明なる基礎ありて、初代の基督教會はも維持せら
 れし定理のみを保存せしむとを望む。彼等の又聖洗機密は灌水式、聖體
 機密は除酵餅、奉神禮は風琴フルート、然り全波羅提士丹教徒皆聖堂に坐席を用ひて之
 を保存すれども、是亦古代教會の許容せし者ありあらざるなり。而して
 其他の教義の概ね羅馬教の反對——極端なる反對——同トく是れ不
 正なる時として、其正教を距ること反りて羅馬教よりも甚しき極端
 として現るゝなり。されば波羅提士丹教の神學者等が羅馬教の教義の
 不正なるを詳しきせしめて之を矯正せんとしつゝ、い太く反對の方向を取
 りて一層の偏頗迷惑は陥りしや明なり。故に我正教の概ね兩反對の方
 向は傾ける兩極端間の確乎たる中道として存し、羅波兩教の正しきを
 含みて、其正しからざるを除ける真理の圓滿として存するなり。

第三章 波羅提士丹教の根本迷惑即教義に於ける教會の殊格を
 波羅提士丹教の迷惑の由りて出でし主なる源は、其教徒が教義に於け
 る教會の殊格アプロプリエ、即聖傳諸教師諸公會の殊格を斥け、少くも其原聖書の解
 釋と各人個々の所解と委ねて、之を信事しんかうじに於ける唯一の教導と爲し
 あり。而して其斯く爲じ、い太く聖書の誦讀研究を拋棄し、信事に理
 性の與かるを壓抑し過したる。又彼等との反對にして、外部の殊格
 を高め過したる。中世代の構造傳を古代の正傳スホラスチカと混同、中世代の羅
 馬教の諸公會を古代の全地公會つくりこと列じ、中世代の煩瑣主義の神學者、即
 天使博士セラフィム、博士等アンゼリム、ヘルトル、ロンバルド、マ、スクウ、ナト、ドロン、スコット其他を古教會の
 教師大アブナシイ大ワシツイ神學者シリコ、ライは列したる、羅馬教會
 は反對してなり。夫れ波羅提士丹教徒の聖書の價值を民目は再興し、之

を翻譯解釋し、之を傳播して、西方基督徒の宗教的意識を鼓舞し、徳義を
 矯正せしこと少からざれども、聖書其物——其入典カノンの聖傳よりて維
 持せられ、聖傳の幫助——教會の教導によりて正しく了解し得らるべ
 き者なるに、聖書と解釋するも聖傳の幫助を排斥し、基督徒として聖書
 を了解するに必要なる幫助と、堅固なる根據とを失ひしめたり。又彼教
 徒の聖書の解釋を各人個々の所解に任せ、其解釋を隨意にせしめて、信
 仰を純粹なる主觀教スブエクティブに轉ぜしが、かくての固より宗教上の信認をして
 堅固ならしめ和合せしめ得べきもあらず。然れども彼教徒の實地プラクティカの其
 原理と距ること遠くして、理論上に於ての傳と排斥するも、實地上に於
 ての教會の古傳を多く固守するなり。例へば彼等の聖書の入典——聖
 書の幾何を須らざる信認すべきか、その又何々なるかを固守すれども、こ
 のこれ傳よよる者にして、聖書よの之を言ひざるなり。彼等の古代の三

信經、即ニケヤの信經使徒の信經大ア、フナシイの信經に特別の尊敬を
 致して之を保存しつゝ、其中に明示せらるゝ基督教の最要定理たる、三
 位一体、基督受体の信認をも古傳に基て固守するなり。又彼等が古教會
 の教師の殊格を排斥しつゝ、自教の新教師たるリ、ローテル、ランフトン
カソウ、カンと其著書とに附する價值は、我正教會が古代の教師と其著書
 とに附する所を譲らざるなり。斯くの如く其原理も反くが故も、彼教會
 少くも其重なる教會の幾何か其教義の鞏固と協和とを維持するを
 得れども、排斥及主觀教の破壊主義の勢力を得て、遂に彼教の分裂を來
 し、現も其神學者及小派中も聖書——の全部若くは或る部分を否定し
 基督教の根本定理を否定する者さへ稀ならざなれり。
 次に波羅提士丹教プロテスタントの分裂せし原因は、其教會の体制上に於て神職の價
 値をいたく弱めしにもあるなり。而して其原理も於て、神品の——俗人

と全く別地位にして神設に係り、其職務も特別なる恩寵の成聖を降されし教會の役者たる價値を排斥せしめ、是亦羅馬教の反動によるなり。抑、羅馬教會にては、神品が甚高く俗人の上より立ちて、其地位を濫用し人民を壓抑したること少からざりしかば、波羅提士丹教徒は全く神職の價値必要を排斥し、聖書の或る箇所出埃及記二十九、五、六と不正に釋きつゝ、全信徒の神品たり信徒の皆神前に同等なり信徒の皆神職の仲保によらせして直接に神に向ふの權ありとの説を公言せり。然れども神は撰ばれし人々——舊約ありては希伯來人、新約にありては基督徒の、不信者の中にて特別なる神の聖産おんちのの如きものたらざるべからざとの意なる舊新両約の全徒神品の教示は、神事を行ふ神靈的役員おんちのの神の教會も入用なると拒まざるのみかり、両約共其成規よりて之を立

て、利未八章其他馬太十章路加六、十、約翰十五、十六、二十、二十八、二十九其他三十七、二十八、以弗所四、十一、至十三、哥林多前十二、二十、二十八、二十九其他

會役の實地も於ても之に備へ之は任ふる人々を要し、神事を行ひ諸機密ひそかにも於て聖神の恩寵を他人も降すが爲も、特別なる監督者教導者——神靈上の牧者無からんに、其秩序も固く立つを得ざるなり。されば彼教の設立者自らも之を認めざるを得ざりて、初めより其原理も於て全く牧師職の必要を排斥せしめ、後實地上は其再興の必要を認め、牧師教師を立てたり。唯彼教の牧師教師の、其職務も如何なる高等の全權、成聖をも有せざれば、機密を執行するに正當の權なく、其人民も於ける相當の勢力をも有し得ざるなり。しかのみならず、其諸會中多くの司祭職を再立せしめ、由りて以て下級の神職も聖神の恩寵の降さるゝ主教職を排斥せり。これ羅馬教の驕傲奢侈なる主教プレラトの厭ふべきを憶ひてなり。さると只後み至りて波羅提士丹教の堅立せし北方の諸國——
 丁孫瑞西英吉利のみは、主教職の再興を必要と認めしといへ、其主教

職も固より正羅兩教會に於て、此職の有するが如き殊格なきなり。斯くて彼教徒の教會上の高等政治の中心たる主教權を動搖したれば、止むを得ず其教會を世上の政府の管下よ置き、殊に日耳曼及英吉利政府は特別なる教務大臣を以てし、殊に日耳曼及英吉利世俗の役員より組織せらるゝ、コシストリヤ教務所を以てし、ゲストラト市廳を以てして會事を治理するか、さらば全く一地方教會會衆の司配に委ね、瑞四蘇格蘭の、レフホざるべからざりしも、彼此皆外面上教會の自立の爲まも、内面上信仰の基礎の爲にも、甚有害なるものなり。さて其小派に至りては、教師の職掌を自稱教師よ委ねて神職悉皆を排斥し、其教師よ直接に神の啓示を受くる資格ありとするなり。

第四章 信仰を以て義とせらるてふ教義

彼教の神學者等ハ殊よ好みて誇稱すらく、人ハイ、ス、ハリストスの教訓の恩寵に於ける一の信仰に依りて、成義救贖せらるるとの眞正なる

基督教の教義ハ、プロテスタント波羅提士丹教に於て再興解明せられたれば、各人の功勞諸善行も、其救贖よ於ける外助、教會の幫助も、基督徒相互の爲まする祈禱、殊に死者の爲にする生者の祈禱も、罪人の爲まする諸聖人の仲保も、共に救贖事業上よ何の價值をも有せざとされど、其眞に彼教の所説中よて、殊に成果なき者ならざるやハ疑ひし。抑、此教義たる、彼教の植礎者殊にリユ一己の一時の經驗追想に由りて起りし者よして、かの太く各人の功勞の神前よ於ける價值を誇大にしたりし、専ら外部の善行を以て敬虔とするを屢なりし、過分善行の寶藏を捏造して太く教會の新禱諸聖人の仲保等の教義を毀損したりし、羅馬教會の反對に開發せし者なり。而して彼教徒ハパウエルの書冊中の或る箇所殊に羅馬三ノ二三四、三十八、加と不正よ了解して、之を其基礎とするも、使徒パウエルハ其加拉太人及羅馬人よ遣せる書中に、イ、ス、ハハリストスよ於けるの信

仰より神の恩寵によりて人々の義とせらるゝことを述べつゝ、毫も之を以て善行の價值必要を排斥せんとの思ひざりしなり。否彼の只よ人々の救贖を摩西法の外行、即割禮、安息日を守ることを等に歸したる猶太主義と取る教師等の不正なる自恃心に反對したるのみなり。さればそのれをたのむよりを其羅馬人よ遣せる同一書中に、主ハ其公義ナル審判ノ日ニ各人ノ行ニツレテ之ニ報フンといひ、六二其コリント人よ遣せる書中も、若シ誰カ山ヲモ移スバカリノ信仰ヲ有ストモ、實行ノ愛ヲ有セザラシニ六何益カアルベキ前二三といひしなれ。斯かる意味ハ使徒ペト^ル木カアンの書中も認むると得べく、約得前三ノ十七殊も又使徒ペテ^ルの如き、一の信仰によりて人の義とせらるゝなりといふ、不正の意義も向後で直言しけらるゝ、苦シ自ラ信仰アリト稱ストモ、行方々何其益カアラン、信仰豈其人ヲ救フコトヲ得ンヤ。

死スルヲ如ク、信仰モ行ナク死スルナリ。雅各二ノ十と。さるがらに彼教徒ハ太ク使徒ペテ^ルの書を喜ばせしめて其眞確なるを排斥すれども、イ、ス、クリストスも親しく其弟子等も向ひて、善行もよりて各自の信仰を耀がすべきを遺命し給ひ、馬太五且宜ふらく、我ヲ呼ビテ主ヨ主ヨト言フ者盡ク天國ニ入ルニハアラス、六之ニ入ル者ハ天ニ在テ父ノ旨ヲ行フ者ノミナリと。次ぎて又公義ナル審判ノ日ニ主ヨ主ヨ我爾ノ名ニヨリテ預言シ爾ノ名ニヨリテ奇跡ヲ行ヒシヨアズヤトイフ者多カリナン、時ニ我明カニ之ニ告ゲテ我曾テ爾等ヲ知ラズトイフン、馬太七ノ十三と。夫れ彼教の此教義として若しさながらに實地に應用せられたらんより、終りの基督教の徳義と破壊すべかりしならん。彼教徒が此点に於ても、自教の原理も不忠なる者として現れしことを、中々幸なれかの實際も恩寵、自由、一信成義等の波羅提士丹主義の觀

念を我意と放逸との傳播に變じたる少數の教師等を除くの外、多分の教師の一信成義の原理を以て只人々内部の敬虔なる心地が、救贖事業上は價值を有すること、外部の敬虔なる諸行より多しとなすのみに歸せしかば、其徳義上の情態に大害を來さざりき。されど彼教徒の教會の傳を排斥するが故に、定理的教義の開發上は於て、此教義の彼教徒と基督教の正しき理解を距ること一層遠き、若干の不正なる意見と推論とを導きたり。

第五章 諸聖人聖像畫不朽体の尊敬及死者の記念に附きて波羅提士丹教徒の所説

波羅提士丹教徒の曰ふ、我等の救贖の望を獨一救世主イエス、ハリネトスに置くからば、神母其他の諸聖人に向ひて救贖扶助を請ふの要なしと。さて又之を基として、我正教徒の諸聖人に向ふをバ恰も唯一の仲

係者、贖罪者たるイエス、ハリネトスを藐如するが如くは、視做しつゝ、

諸聖人に祈禱歸向するを排斥し、諸聖人尊敬を一神崇敬に矛盾する者

神誠第一款に反する者と思惟し、諸聖人の像、不朽体、遺物等を尊敬するを偶像崇拜——神誠第二款は違背する者と直稱す。然れども我正教徒の神母其他の諸聖人と尊敬しつゝ、毫も之を以て一神崇敬の反對に立てんとする思ひト。否我等の諸聖人を尊敬するは諸神として之を爲すよりあらせして、神は喜ばるゝ者として之を爲すなり。我等は神を崇敬しつゝ、之よりて又、神に近く神に喜ばれ神の親しく榮し給ふ人々をも尊敬するなり。我等が諸聖人を尊敬しつゝ、其助力保護を請ふの祈禱を以て之に向ふは、我贖罪者イエス、ハリネトスの我等の爲よし給ふ至上の仲保保護の信を置かざるが故にあらせして、諸聖人の神に近きと諸聖人よ於ける神の愛とを信じ、且其已が或る自然而上の能力

を以てするにあらせしめて、神の親しく被選者に賜ふ恩寵より我等を助くるを信ぜるによるなり。又我等が祈禱を以て諸聖人に向ふに、地上教會と天上教會との活ける交通に於ける已が信仰を證明する者にして、彼教徒が諸聖人に願告するを排斥するに、此聖なる交通を斷のなり。我等が諸聖人の像、不朽体と之は關係ある者とを敬するに、其外形十之を組成する物体に於てするにあらせしめて、此等諸物は關係ある諸聖人を恭敬する記念に於てすること、猶己が愛敬する人々の遺物を待するに、愛と尊敬とを以てするが如し。しかのみならず、我等の諸聖人の不朽体、畫像、遺物等を媒介となして主の明かお其仁慈と寵祐とを人々に現し給ひしこと少からざるを知る。是聖書一列王紀下十三ノ二十と教會の保存する多くの傳説の證明する所なり。然るに若し諸聖人及其不朽体、畫像の尊敬が、時として平凡固陋の信徒間お於て妄信の質を受け、

若くは濫用に起因を興へ得ることあらざれば、凡ての善事聖事も不正なる解釋と濫用とは遇ふことあるを記憶すべく、萬事は於て不正なる解釋濫用の之を洗滌排斥し、其基本たる真理の之を守りて一層明白正確なる了解應用に之を導くべきなるに、彼教徒が中世代の羅馬教徒中にありし濫用の故を以て、聖人尊敬の基本たる高尚且聖なる觀念をも忘却排斥せしむる不當なり。

次に波羅提士丹教徒の、唯一の神、神人間の唯一仲保者、イエス、マリヤ、トマスに依頼せざるべからざるの基礎よりして、死者の爲にする公私兩祈禱を排斥し、恰も正教徒が此祈禱を以て死者の運命の神定を變へんとする心膽を表すが如く、思惟すれども、我等の毫もかゝる心膽を有してかくするにあらざり。只我等の互に相愛して、此世に生活する時、他世に逝きたる後、相互に祈禱を以て此愛を表さん、神の意に道

ふと信じてかくいするのみ。波羅提士丹教徒にして若し死者の爲にす
 る祈禱を排斥する已が原理に從順せば、生者相互の祈禱をも排斥せざ
 るべからざりしならん。此祈禱に付きての聖書に明瞭なる證明雅各
五ノ
十六至十八約翰五ノ十八約百四十二ノ七至九羅馬十五
ノ三十、三十一以弗所六ノ十八、十九哥羅西四ノ二、其他あるを以て、彼教徒
 の敢て之と排斥せざりき。抑、基督教の信仰の吾人に、神ハ死者ノ神ニア
 ラズシテ生者ノ神ナレバ、馬太二十二ノ三十七路加二十二ノ三十八此世に生存する
 人々も、他世に逝きし人々も、皆神前より於て一の生くる教會の一致を爲
 すと教ふ。斯れば、彼教徒が死者の爲にする祈禱を排斥せしめ、只生く
 る教會一致の觀念を壊りしのみならず、己が親近なる死者と記憶する
 所の聖にして且貴き慰安をも自己より奪ひしなり。且夫此祈禱として
 若し、中世代の羅馬教會に於て暗昧なる煉獄の想像に伴はれ、神品の利
 と貪る機械となりたるが如くに、妄信濫用の起因となることあらんも、

是によりて教會の高尙聖且貴重なる——死者の爲に祈禱する風習を
 忘却排斥するは是亦不當なり。

第六章 宗教上の外事即敬虔なる外部の勤行及禮儀に附きての
 波羅提士丹教の教義

波羅提士丹教徒ハ、救贖に於ける善行の價値を排斥しつゝ、わきて敬虔
 の外部の勤行、即聖地旅行、齋戒及捨己、無妻等の嚴肅的諸行に敵對する
 なり。抑、中世代の羅馬教徒が外部の勤行の價値を誇大よし、敬虔の本義
 を之に歸じたる者も多かりしかば、波羅提士丹教徒ハ只無益なるの
 みならず餘計有害なりとして之を排斥せり。是外部の勤行ハ人々内部の
 心地に換はりて、浮誇譎善の起因を爲すあらんと以てなり。されど波羅
 提士丹教徒ハ此点に於ても極端に陥りしなり。人の神靈的存在者なれ
 ば、固より先づ其宗教的生活上より内部の心地と緊要とするも、外部體内の

生活を以て生存する者よてもあれが、其内部の心地の外部にも表されざるべからず、又敬虔の外部の表彰たる齋戒、嚴肅的諸行等の必要なるは、多少諸宗教の皆認むる所にして、イ、ス、ハリストスも親しく言と例として之を其門徒に誡め給へり。彼の久しく祈禱して其弟子に祈禱すべきを誡め、久しく齋戒して之より大なる價值を附し給ひ、馬太四ノ二、四十一、十七、九、路加六ノ十二、其他無妻捨己等の嚴肅的勤行も附きても宜ぶらく、人皆此言ヲ納ルマ太十九ニハアラオシテ只稟賦者ノミ之ヲ納ルマ太十九ナリマ太十九爾完全ナラシト欲セバ往キテ其所有ヲ售リテ之ヲ貧者ニ施セマ太十九トされバ波羅提士丹教徒の克己捨己の高尙なる勤行を排斥しつゝ、通常一般の義務要求と全徳義の限界となして、基督徒の徳義上の生活を、獨り高尙ならざる通常徳義の平面上のみ立てしなり。波羅提士丹教徒の敬虔の外部の表彰を排斥しつゝ、可能丈なべての外

事マ太十九奉神禮の外儀を省畧せんと力マ太十九ひれども、是亦、教會の外事は奢侈花飾を極め之を宗教の本質マ太十九と爲して宗教の内部の意味を掩蔽壓抑せし羅馬教の反對も出でし者にして、波羅提士丹教徒の此點に於ても反對の極端に陥りむなり。既マ太十九リ「リトテル」派の徒も教會も用ふる裝飾、奉事外儀の多分を排斥したりしかば、彼等マ太十九のとにかく其聖堂に基督磔殺の圖及其他若干の聖像畫を存し、奉神禮の唱歌奏樂の更なり、鐘聲マ太十九聖行マ太十九をも存して、其拋棄せる古き祈禱文讚美歌も代へて、已が新なる者を編制せり。然るは「レフテール」マ太十九「改革派」マ太十九「是なり」マ太十九。其他の小派の徒の更マ太十九も歩を進めて聖堂を毀ち、聖像を嘲り、外儀の遺風を悉く斷ちたりしかば、遂マ太十九も其奉神禮の一の傳道に變つて、聖堂よりも學校マ太十九も類似せる通常の室の祈禱會の會場となり、萬事マ太十九の判断力教習のみに變つて、判断力の如くは宗教上の高尙なる満足を要する感情想像の爲に、何等の營養もあらず

走なれり。是固より冷淡なる思考人種たる日耳曼人中に彼教の開發せしよもよるといへ、羅馬教との戦の裡は開發したればこそ斯かる極端よ走りて、自教徒中よすら其外儀は屬する部分の乾燥無味なるよ不満愁嘆と表する者あるに至りしなれ。

第七章

機密に附きての波羅提士丹教の教義
波羅提士丹教徒の教會の外事は反對して禮儀の多分を排斥せしのみならず、單よ宗教上の觀念と表様するよ過ぎざる尋常の儀式、又ハ使徒後に至りて教會の教父等よ設立せられて、漸次に開發したる儀式と共に、自身は恩寵の能力を有し、且其始をイイスス、ハリストス及諸使徒に受け、爾來常よ基督教會内よ尊び守られし所の聖事をも排斥せり。蓋彼教徒の神設にかゝる機密と、後世教會の設立せし禮儀とを混トて、之因がを興へしハ、一には機密執行上よ少から羅馬教の機密有効説 エクスオペレオペラト ざる新設毀損を爲し、羅馬教徒なり。

の反對よ起ちつゝ、機密ハ自身ニヨリテ客觀神ノ恩寵ヲ機密承領者ニ通ズルニハアラスシテ、思寵ヲ領有スル信仰ノ外部ノ表様又ハ印證タルニ過ぎザレバ、承領者ノ信仰ニヨリテ主觀價值ヲ有スル者ナリとの見解よ走せたりしかば、さてハ自然よ通常禮儀の多分の如くよ諸機密をも排斥するの傾向現れしなり。かくて彼教徒ハ機密の多分の聖書よ其基礎なるといひて自身を辯護しつゝ、されど其辯護ハ不正なり。略少明瞭なるカテヘシス神學書よ引用する所の多機密の多分よ全く排斥するが、然らば之を通常の儀式よ比したれども、聖洗、痛解、聖體の三機密に關しては否むべからざる聖書の明言あると認めざるを得ざりて、馬太二八ノ五馬太十八ノ二十八約翰二十ノ四路加二十一至二十三馬太二十六ノ四十八至五十八之を保存せり。然るよ後又羅馬教會が密所の認罪と釋罪の權を濫用せし追想は彼等を導きて、遂よ痛解機密をも排斥し、若くは少くも内心

悔罪のみを必要と認めて、其重要なる三外儀即口認釋罪を排斥せしめたり。其餘の二機密聖體に關して彼教徒中に異議爭論百出せしむ。終に機密の是信仰の表彰印證も過ぎせどする。彼徒の根本見解に準じて、此二機密の恩寵力を排斥せり。ざるを此二機密も附きては、確乎明瞭なる言の福音書上に在るが故に、リニテラ派の徒は敢て其反對に立つことをせざりき。リニテラは聖體機密も於て餅酒のハリメトスの禮血も變體する(transubstantio)を否定したるを、我等は餅酒を承領シツ、實ニリメトスの體血も見エズシテ餅ニ餅ト共ニ餅ノ下ニ(in pane, cum pane, sub pane)在スハリメトスを承領スルナリと信認せしむ。レフルム派の徒は此點も於てリニテラ派の徒よりは一定もして次第ある者と現れ、機密一般も於ける波羅提士丹主義の根本見解に準じて、聖體機密もハリメトスの死を記念するが爲も執行せらるゝ通常の儀式にして餅

酒はハリメトスの體血の表記に過ぎせどせり。但し、レフルム派の教師中に激しカリウンは温和聖洗機密も附きては、リニテラ派の徒と同じに、レフルム派の徒と同じに、アナバプティズム派の徒との間も大爭論を生せり。アナバプティズム派の徒は、機密は承領者の有意の信仰によりてのみ價值を有すると思得とする。波羅提士丹教一般の見解よりして、嬰兒の授洗と排斥し、幼年の時も聖洗を受けし基督徒も向ひては、成年も至りて更に授洗することを促しせどす。リニテラ派の徒は彼等を異端者、地獄の子と呼べり。されど、波羅提士丹教の主義よりして言ふときは、義務的の價值なき傳へるる兩派の徒の所説も聖洗に附きての附きよりも、己が見解を次第あるなれど、アナバプティズム派の徒が確むるの根據あるなり。而して其他の小派も、カソセル派も、神の親しく我等も賜ひし受神恩の方法を棄て、全く諸機密の價值を排斥せり。

第八章 波羅提士丹教の絶待的預定説

波羅提士丹教の成義説として次第に開發すれば、勢彼教徒をして絶待的預定説に至らしめざるべからざりき。抑彼教徒の所説によれば、善行は人の救贖上何の價值をも有せざるのみならず、罪よりて善を行ふの能力と自由とを失へる沈淪後の人は、如何なる善行をも自ら行ふことを得ず、人生の諸善行は専ら神恩の所行にして、凡そ人の自然の徳行と名けらるゝ者、即人の天性自然の傾向よりして起る所の者は、罪なる――魔鬼に属する所行なりとす。されば、若し斯くの如く人は自己の方よりして如何して神の恩寵を招き得ざらんや、又若し人の方よりする救贖の唯一要款たる信仰其者を、神の恩賜たるに過ぎざらんや、ホのフカは自ら左の問は起るべし、神の限なき愛は諸人一般に及ぶなるに、或る人々は信仰し恩寵を受けて救はるゝを、他の人々は信仰せず恩寵を受

けせして亡ぶるは如何と。此問題を決するに當りて、リネーテルを既に絶待的預定説、即神は己の欲する者を救又は亡と定めて、有限なる被造物は之を問ひ之を争ふとをだし得せ、との意に傾きしかど、實地上謹慎する所ありて明亮に次第的に之を露すとを欲せざりしが、レフォルム派の徒は此説をして最後の極端に至らしめたり。神の恰を何の功勞をなき或る人々をを救ふ、他の人々を亡に定むる、殘酷不正の專制者の如くに見え、人々個々の自由も、凡ての徳義上の褒貶を、全く其價值を失ふ所のかの暗昧なる預定説の始を爲し、ハツウグライにして、之が局を結びしはカリウソンなり。夫れ斯かる所説に従ふ時は、人々皆救ヲ得テ眞理ヲ知ルニ違ヒシコトヲ望ミ給フニ提摩太前博愛の父たる神のことの正しき觀念は壞られて、徳義の基礎を悉く覆さるべし。然るにレフォルム派の徒は、自説の根據を使徒パウルの書冊中に見出さんとすれども、馬九章

が之の言へる神の預定は附きての教は己がアウラムより出で、
 摩西法に属するを名として、自己を救はるゝ者の數中に自信算入せし
 士師等の謬見を反對せしものとして、人を個々の自由を排斥せざるの
 みならず、反りて之を確むる（正教訓蒙第一條、預定所の神の預知に付き
 問の中は説かる、如し）ての教義（羅馬九、三十二）と密接を連結するなり。此外に「レテナル」派の
 徒は、自説を確むるが爲め、福アウグスティンの著述を引用すれども、此
 支柱は教會の殊格を排斥する波羅提士丹教徒の爲めは確乎たるを
 得ざるなり。まして福アウグスティンを此點に於ては、徳義上の生活と救
 贖の必要條款とを一人々個々の自由に歸したる（少くも福アウグ
 ティンの自著中にい
 如し、（ハ）異端者ベラギオンの説を反對して、這説に陥りしと疑なきをや。
 以上章を重ねて波羅提士丹教所説の諸點を觀察せし所によれば、彼教
 又は淺見不定偏見誇大矛盾（はた）とて、亦迷惑の甚多きを明かな

か、
 第九章 波羅提士丹教の分裂并其重立ちたる「リテナル」派と「レテナル」派
 の兩派
 波羅提士丹教の其原理の淺薄偏見なるにより、教會の傳を排斥するよ
 より、教會の生活上に鞏固なる組織なきによりて、開宗の當初より今日
 に至るまで、種々雑多の諸會諸派を分裂して止まざるなり。其中彼教開
 宗の當初に當りて、日耳曼の「リテナル」派と瑞西の「レテナル」派との分裂
 せむを其嚆矢とす。抑、宗教改革は殆ど同一時に、一樣の起因により、同一
 の方向を取りて日耳曼及瑞西に起りしを、當時業已其嚮導者等の間
 へ、神の恩寵の人の自由を於ける關係及聖體機密の問題に、附きての争
 論起り、後愈々其熱度を増して、遂に全く日耳曼の「リテナル」派と瑞西の「レ
 テナル」派との分裂するに至れり。而して日耳曼の「リテナル」派は其原理

を伸張するも謹慎する所ありしを、瑞西の「レフォルム」派は其原理を頗る過激な次第的に伸張したれば、其正教を距ること「リイテラ」派より甚しかり。「リイテラ」派の徒は理論上教會の傳の價値を排斥すといひ、實地上教會の傳を多く維持すれども、「レフォルム」派の徒は頗る過激な出で、傳の遺れるを悉く廢さんと力め、聖體機密に於て「リイテラ」派の徒は、主の體血の見えせして餅酒を存すとすといひ、かくまでとなりとも之を認むれども、「レフォルム」派の徒は、餅酒のたゞハリストスの贖罪の苦難を記念する表記に過ぎせし、神の恩寵が人の天性に於ける關係の教義に於て「リイテラ」派の徒は、人の天性の損害せられたるものなれば、殆ど全く其自由を失ひ、且神の特別なる恩寵なくして、善事を行ふに任へざる者なりと認むといひ、とにかく、人が自然によりて行ふ善事と惡事との間にも徳義上の或る差異のあるを認むれども、「レフォルム

ム」派の徒は、人の神靈上の天性を恰を全く死せる者、其善に於けるの自由を全く壓抑せられたるもの如き者とし、さて又人の自然の行爲を罪と認むるなり。「レフォルム」派の徒は、人々の救贖を専ら神の恩寵に歸するの斷案よりして、暗昧なる絶対的預定説を推論したるも、「リイテラ」派の徒は、其過激なるまゝ之を受くることをせざりしかば、之に由りて兩徒の分裂の愈々鞏固なれり。次に教會の外事上は於て「リイテラ」派の徒は禮儀の價値を排斥すれども、かの殆ど全く禮儀の遺風を絶やし悉く聖堂の裝飾を除かんと力めて、遂々尊大嚴肅なる基督教の奉神禮を失へる。「レフォルム」派の徒の如き過激を以て、之をせざるなり。教會政治の組成上は於て「リイテラ」派の徒は、多く貴族主義の原子を維持して、其會衆の地方の貴人又侯伯に服すれども、「レフォルム」派の會は、多く過激な平民主義を採りて、會衆の何人をも關涉を受けず、且全く相互に孤立

す。かくれば「レフォルム」派の各會衆間に於ては、教會上の義務の成否及各會員徳義の監督も、教會上の要求懲罰も、「リニテラ」派よりの嚴重なり。かくて又「リニテラ」派「レフォルム」両徒中にも分裂起れり。先づ獨逸の「リニテラ」派に、開宗の當初よりして既に其學者の間に各其主義を異にして相協和せざる三主義あり。一は保守主義コンセルヴァティブ、古リニテラ主義とも正統といひ、二は自由主義リベラリスムといひ、二者の中間なるを調和主義ワニオンといふ。其最初の代表者ハ日耳曼の宗教改革嚮導者たりし「リニテラ」カルルシタメラメフトンにして、其後此三主義の共に種々の變遷を爲して、今尙「リニテラ」派の中より存す。保守主義の徒ハ最初「リニテラ」メラメフトンの時に當りて完成せられたるまゝに之を保存せんと力め、自由主義の徒ハ自由と排斥との精神を以て愈之を開發せんと力め、近時此主義ハ極端なる偏理主義ヲ取りて基督教の根本定理をも至るに調和主義の徒ハ、たゞは兩主義の中を取るのみならず、「リニテラ」

「レフォルム」派は時としてハ羅馬教よきへも接近せしめんと力む。されど調和主義の徒ハ、自身は如何なる一定の原理をも有せざれば、其意見常に動搖す。次ハ瑞西の改革派も、其最初よりして既に分裂せり。抑同國の宗教改革の首として「チリフ」セネワの両地も起りて、共に、人の天性よりて行ふ所の善行ハ神の恩寵を外よしてハ救贖上ハ何の價値をも有せざるとの同一原理を取りしも、「チリフ」の改革者ツウングライハ、とよかく、其徒弟中ハ嚴重なる徳義の原理を鞏固せんと欲し、セネワの改革者「レフォルム」ハ此主義よりして徳義上の二律背反アンチノミスム無差別アパアホリキム、即惡事と善事との間に定すを推論せり。然るも「カリウウ」の久しく耐忍努力して、以て瑞西の「レフォルム」派中も起れる諸主義を圓滑にし、嚴重なる道義の精神を以て其會衆を改良したりしも、暗昧なる絶待的の預定説を發達せしめて、多く

の人々を自己より離れしめたり。其分離せし「レモンストラント」又「アルミニヤ」派レイテンの「プロフツル」キコフ、アルミの名稱を以て殊々荷蘭は傳はりし者として「カリウウ」派の預定の定理を受けき、其他の點も於ても瑞西の「レフォルム」派に比すれば、一層自由なる發達を爲せり。

第十章 十六世紀に當りて波羅提士丹教中より起りし極端の分派たる「ツチン」「アナバプティズム」の兩派

波羅提士丹教プロテスタントの其最初より前記の重なる二派「リユートル」及「レフォルム」の外尙若干の小派あり。其中殊々著しき「ツチン」「アナバプティズム」の兩派にして、其は波羅提士丹教の自由の原理を「リユートル」「レフォルム」兩派は於て開發したる境界よりも遙に伸張せしめんとして起れり。「ツチン」派の宗教上の思想界に於て、自由の原理を極端に至らせし派にして、既に宗教改革以前「グマニズム」蔓延の頃より當りて、殊に南歐

太利及西班牙は蔓延せし擅想者の中に起れり。然るも其後宗教改革の南歐は傳へるも及びて、嚴酷なる處置は遇ひしかば、擅想者中多くの其故郷を脱して、中歐諸國殊は波羅提士丹教の堅立せる地方は其觀念を傳へそめにき。其一人なる西班牙の醫師セルヴェトは、其放恣なる思想を「レフォルム」派のセチワに傳へしに、セチワの改革者カリウウは人民を煽動して之を焚殺することを命じ、且之を以て波羅提士丹教のたゞに其固有の意向も合ふ方向も於てのみ、思想の自由を許容し得るを示したりしが、其他の擅想者の更に遠く東方に趣きて、其思想を傳ふるも稍便利なる地方を見出せり。その波蘭匈牙利トランシリフニヤなり。伊太利を脱走せし二人の法學者レイリイフラス、ツチンハ此地に在りて、已と一樣の思想を有する人々を一として、ツチン又ハウニタリと呼べる宗教的の一會合を爲し、波蘭のラハウの其重なる避難所となれり。抑、聖書

は基督教教義の唯一の源泉たらざるべからざるといふ、波羅提士丹主義の原理より歩を進めて、「ソチン」派の徒は聖書其物の中に於ても、たゞ全人知る明白にして、理性も反せざる箇所をのみ教導とせざるべからざるを説き、之を基礎として、不詳奥密なる信仰を排斥して、先づ聖三者及神之受體の定理を否定せり。彼等曰ふ、神ハ一位ニシテ神父是ナリ、由リテ亦「ウニタ」又「アンティツリニタ」神子ハ聖三者ニ反對スル者ノ稱あり、イハス、ハリストスハ己ガ高尙ナル義ノ生活ニヨリテ、神ノ權能ト其稱讚トヲ得タル宗教上ノ大教師ニシテ、聖神トハ人々ヲ善行ニ固メン爲ニ遣サル、神能ノ謂ナリ、イハスハ、ハリストスハ其高尙ナル教ヲ以テ人々ヲ教化セリ、其死ハ捨己ノ良能ナルモ人々ヲ爲ニ贖罪ノ効力ヲ有スルモノコアラズ、人ノ天性ハ今昔元始ノ時ニ造ラレシマ、ニシテ元罪ハ存セズ、死ハ人生自然ノ終局ニシテ、罪ノ結果ニハアラズ、宗教上ノ如何ナル機密モ、禮儀モ、元ト不必

要ナレドモ、基督教徒ノ間ニ宗教上ノ一致ヲ固メン爲ニハ、其中ノ若干ヲ維持スルコトヲ得ベシト。かくて「ソチン」派の徒は、其實際は聖物を嘲弄すること甚しきを以て、十七世紀の半に至りて遂は波蘭より逐ひ出されしも、フランスリワニヤは堅立して、後地邦殊は英米は傳はれり。
「アナバプテイズム」派の徒の意向する所は、如何なる放恣強迫も購嗜せざして、波羅提士丹教の公示したる自由の原理を宗教の生活上も、社會の生活上も、可能充全は實施せんとするあり。彼等ハ又之を基として、世は存する主權と公衆の關係とを顛覆し、人々の中に地位の均等、財産の共有を制定して、以て神の國——愛、平等、自由の國を地上に立てんとを望み、且無意なる幼時より於て受けし聖洗の有効のものと思はるを得ざるを教へ、授洗前の生活及秩序に連絡を斷つるの徴として、新聖洗を其會員に促せり。之によりて、彼更洗者の名あり、抑、此派ハ改革思想の初

めて傳播せし時に當りて、サッソニヤシワイビヤも起りしものなり。ウチ
 ルムの會議後、リューテルのワルトブルグも在り、其友人カルリシタが
 リューテルの觀念を名として、急進なる改革をウッテンベルグも起さん
 とせし時、又當りて、ツウカウスの預言者と呼ぶる、アナバプティズム派
 の傳道者を、此地に現れて一層急進なる改革を促し、幼くして聖洗を受
 けし者が第二次の聖洗を受ざるの必要を傳へ、又其所説を確めん爲ま
 り、其自ら神より受けたりといふ啓示を引用せし、リューテルをウッテン
 ベルグも來りて激論を爲し、且彼等を地獄の子と呼び、之をアナフ、マ
 處して、ウッテンベルグより放逐せり。是に於てか、アナバプティズム派の徒
 の日耳曼の諸邦シワ、ビヤ、テニリン、
ギヤ、フラン、コニヤに散りて、人民を乱せり。其首領の前に
 學校教員たりしフホマ、ミンツェルにして、甚だ才能ありて、忍耐強く、且熱切
 なる雄辨家なりしを、極めて空想狂信の人なり。日耳曼も騒亂を起せる

騎士グツテンシッキング等と聯合し、農民を煽動して領主諸侯も反
 かじめたりしが、少くして乱平ぎ、ミンツェル自身を捕りて刑に伏せ
 るも、アナバプティズム派の徒の一時静まりて離散したり。されど數年
 を経て復荷蘭瑞西及日耳曼西部の人民を乱したりしが、其群集は身分
 の賤しき人々——不文の職工、旅行俳優、流浪人の輩なりき。其中の一人
 レイデンの裁縫工イオアン、ボクゴロドなる者、其友人と共に潜にミニ
 ュンステルに入りて、人民を同地の侯たる主教も反かじめ、之を逐ひて自
 ら新シオンの王——全地の王と稱し、諸民を己が權下も服せしめんと
 せ、二十八人の使徒を諸方も遣せり。かくてミニュンステルの其新なるイ
 ンサリム、新國の都府となり、品級の差別も除かれ、富豪の財産も劫奪
 せられて公共の所有となり、財産の共有も共も婦妻の共有も容れられ、
 公衆の地位のみならず其開化をも平等もせんとて、書籍を火もし工藝

品を盡さんことに定められしが、幾何も経ざるに、市民の其狂暴に堪へ
 ずして前の主教を招還し、シオンの王と其友人との之に致されて處刑
 せられたり。斯くて復審逐起りて離散隠匿せざるべからざりしが、稍、あ
 りて其餘党のシモン、メンノンの一とする所となりぬ。メシノシ、ハナ
 ハアテイズム派は轉宗せし羅馬教の司祭なり。其會衆に稍正しき新體制
 を與へ、其教義を解明し、更洗の外更は若干の禮儀を設け、例へば、洗足彼
 等と従前の狂信的空想より引き出して質樸、嚴肅、精勤を生活せしめん
 ことを勉めしかば、アナハアテイズム派の此時よりしてメシノシトの稱
 を受け、稍、默許せらるる派となりて日耳曼より他邦に傳はり、わきて英
 吉利と北米、此地にありては單にどは傳はれり。
 第十一章 英國教會及其諸党
 波羅提士丹教の、其始めて中歐諸國は起るは當りて、既は若干派は分裂

せしが、其後漸く北歐諸國に傳ゆるは從ひて、愈、大なる變革分裂に遇へ
 り。而して其内殊に異様の氣風を受けしは英國教にして、リッセル派、フホルム派と羅馬教の或る遺物とを混合せる一派なり。
 波羅提士丹教の始めて英國に傳はりしは、一部分の傳道者よりしむ
 のにして、政府の之は同情を表せき。國王ケンソフ八世は波羅提士丹教
 の傳道者を宥逐し、且自らリッセルは反對する文章をさへ著して、之が
 爲は信仰防禦者の尊號(Defensor Fidei)を葩々に受けたりしが、後其エカテ
 リナ、アルレゴンと離縁しアンナ、ボレインと婚配することより葩をど
 の争を起して、英國の羅馬教會に關係なきを宣言し、且葩々權を排斥し
 て自己を教會の首領と宣言したり。されど英國教會の其定理及儀式の
 多分に於て、羅馬教と協和する者たらざるを得ざりき。かくてケンソフ
 の羅馬教は服従する従前の大主教を黜けて、新にシリセフホルム、クランメルなる

者を撰べり。克蘭メルの波羅提士丹教に同情を表する人なりしも、波羅提士丹教の蔓延を許容せざるゲンリフ八世の生存中より、其同情を抑制せざるを得ざりき。ゲンリフ死し、孱弱なるエドアルド王位を繼ぐよ及びて、波羅提士丹教も熱中する輩の神職を従前の組織と價值とを維持しつゝ、國中も羅馬教の遺物を絶して、波羅提士丹教を容れんとしたりしに、後英の王位に波羅提士丹教徒を寛容せしめて羅馬教を再興せんとしたる女王マリアも移りぬ。かくの如く種々なる教党相争ひて更、勝利を占むる間も十數年を経て、エリサウエタ女王位も即き、可能大諸黨の要求を滿さしむる信仰箇條を以て之を相接近せしめんと欲せしかば、ロンドン會議の遂も斯かる信條三十九款を編制して、議院の之を認定したりしが、其三十九條款の實に種々なる教黨の所説を之も調和せしめ得べく編制せられたり。其基礎に波羅提士丹教主義にして、間

羅馬教主義を存し、王權を教會の首領權と認めて、神職に從前の羅馬教の組織と價值とを存し、定理の多分の波羅提士丹教の精神を以て陳せれども、羅馬教徒も其教義の支柱と得べからしむ。例へば其或る條款より波羅提士丹教の一信成義説を陳べつゝ、善行も亦救贖上も價值を有すとの遁辭をも其中に存し、二機密を承認すれども、其他尙機密の効力を有する聖事のあるをいひ、教會の外事に於ても多くの羅馬教の儀式を廢したるも、其餘の之を存せり。

斯く英國教會の信仰箇條の不定貳義なれば、自ら之を種々なる方向に向けて、種々なる意味を解釋するの起因を爲し、古より低、廣、高の三黨ありて、今尙彼教會も存す。低教會の二十九の信條も陳ぶる所を不定矛盾なる儘に悉く維持せんとし、廣教會の可能丈之を純粹なる波羅提士丹教に接近せしめて自由と排斥との精神も之を開發せしめんとし、高教

會の二者に反して一定なる昔時の信條——羅馬教も又幾何か正教も
 も傾かんとするよりあり。高教會より近時に至りて別派一黨起れり。之を
 最高教會といひ、其植礎者たるオクスフォードの「プロフェツクル」ビュゼイ
 の名より因りて亦「ビュゼイスト」ともいふ。此黨の特點は、其殊に正教會に
 對して同情を表するよりあるなり。
 以上の諸黨の英國の國教會内に存するものなれども、此他尙若干の黨
 派起りて國教會より分離せり。始、英國教會の主敎職監督を存するや、蘇
 格蘭の教會の他の波羅提士丹教徒は倣ひて、獨り司祭職長老のみを存
 しつゝ、主敎職を承認するを欲せざりき。かゝれば、之を英の監督教會
 と區別して長老教會といひ、亦其純粹な波羅提士丹教の原理を容れん
 として、英國教會の保存する古代教會の儀式の遺風を排斥するが故に
 「ピリタニ」新教徒出版書「清教」ともいふ。次は王權を教會の首領權と認む

るの一般の義務なりと宣言せられ、三十九の信條を安全あせん爲る旨
 詞を徹せらるゝや、蘇格蘭のみならず英吉利も於ても多々の人々は之
 に抵抗して、別派一黨を爲せり。之を「ノンコンフォルムスト」不問者又ハ「イン
 「デペンダント」無關係者といふ。此黨の既ハ十六世紀の終は組合を爲し、十七
 世紀の半に至りて特に勢力を得、クロムウールの指麾の下に國王を廢し
 革命を起したりしが、其國教會たるを久しくするを得ざりき。さば
 れ今尙著しく勢力を有す。此外も尙派多かれど、其一部の大陸より來
 りし者にして一部の國內より起りし者なり。「サウタリ」「マテリス」「サウタリ」
 第十三章 十七世紀の後半及十八世紀の始に當りて西歐の基督
 教中より起りし「クワケル」「ビュゼイスト」「ケルンシグナル」「クワケル」
 十七、十八、十九の三紀に於ても、西歐より新派輩出して止まざり。十七世紀

の後半及十八世紀の前半に當りて神秘道德主義の若干派西歐に起り、
 羅波兩教會の神學を流行せる乾燥無味の空論を反對して、一層宗教的
 の感情を振起し基督教の徳義上の生活を高尚よせんとしたりしかど、
 信仰上の事理と理解するを鞏固なる支柱を有せざして、新なる迷惑と
 不正なる誘導とを多く招きぬ。是、クワケル「ヒエティスト」「ゲルングラー」
「メトヂュスト」「ヤンセニスト」「クウエテ、メト」の諸派にして、始の四派の波
 羅提士丹教中も起りて其中も傳へり、終の二派の羅馬教中も起りて其
 中も傳へりたり。
 「クワケル」派の始めて英國及蘇格蘭に傳播せしは十七世紀の半頃なり。
 其植礎者ケオルグ、フカグスの通常の靴匠にして殆んど全く教育なく、且
 偏僻者空想者なりき。英國の神學者輩が陳せる所の一樣ならざる宗教
 上の解釋を錯亂して、遂に如何なる教師、神學者、解釋、信條、信經も要なく

たに各人個々に聖書に憑りて、宗教上瞭解する所あるを要するのみと
 の説を爲し、が、次で又聖書も其研究する問題も明解を與へざるを
 見て、左説を爲せり。曰く、聖書其物も死せる文字に過ぎざれば、生くる
 内部の言、即各人の直接に聖神を感じて之に醒起「アウサレ」照明せらるゝを要
 すと。かくてフ「ホー」クス及其徒弟輩の之を基として、國教會に行はるゝ諸
 集會、教義、禮儀を廢して、別に己が集會を爲すことゝせり。其集會にて
 の先づ聖書を讀み黙禱を獻げて後、緘黙して心を一よし、以て内心の振
 起、照明と待ち、若し誰よか斯かる振起「アウサレ」の現るゝとき「男、女、文、不文、説教」
 預言を爲し、其所説の至上の啓示として之を受け、信仰上生活上の教導
 とするを要すとす。されば既に如何なる義務的の信經も、禮儀機密等如
 何なる會事も、不要なりとするなり。徳義上の生活に於てハ福音書に記
 ざるゝ所を可能「アウサレ」文卑近に守らんと欲せしかば、イ、ス、ハリストスの

山上教訓中の或る言を基として盟約誓詞を拒み、裁判に關與し兵役國
 事も服することを避けんとしつゝ、既に制度を爲せる社會の狀態に
 於て、斯かる要求をさながらお實行し得べからざるよの意を留めざり
 き。次は其外面の生活上に於ては、實に端肅平等不羈の氣風を守らんと
 欲せしかば、何人も皆一樣の衣服を着して何人の前にも頭禮脱帽等を
 爲さざらんことを促せり。先づ其會衆自ら稱して兄弟又ハ被賜者てられたるもの
 いひしは、世人の之をクワケルクワケルと嘲稱せり。クワケルクワケルとの戰慄者たのこくの義な
 り。蓋其集會して宗教的消魂エクスタクスを起し、ときよ戰慄するによるか、然らば
 其傳道者が屢人民に向ひて戰慄せよといふよるか、又ハ其兵役と
 避けつゝ、戰慄恐怖するによるなるべし。後、彼等自ら此稱を稱として左
 の如き意味を之に附せり。曰く、我等の使徒の教訓に從ひ、畏れ慄たのこきて己
 が救贖を全くす立非と。然るも彼等の其過活の狀態奇異、舉止粗暴

にして國教會に敵對し、國警兵役等を選びしかば、爲は、始に政府の嫌疑
 を受けて大なる窘迫に遇ひ、非常の忍耐勇氣を以て之を忍びたりしが、
 後其つち一徒つちダリヤム、ベンなる者廣大の地を北米殖民地に得て、之を移住
 せんことを勧めしかば、茲は全く信教の自由を得て、富裕なるペンシリ
 ワニヤ州を開き、廣大なるフロラダルヒヤハ其首なる街となれり。かくて
 「クワケル」派の徒は、其精勵篤實なると過活の狀態嚴格なるとにて、自己
 に対する世人の邪信を吹き去りしかば、他邦にも安全として容れらる
 るに至れり。
 「ピエテ、ズム」派の日耳曼に傳播せしは十七世紀の八十年頃に在り、
 千六百七十八年ドレズデンの傳道者フヒツツ、ヤコウ、シヤチルなる者
ピエテ、ズム *Pia desideria*、即敬虔ナル希望、内部ノ敬虔ヲ振起シ徳義ヲ矯正シテ基督
 徒ノ生活ヲ改良スルノ希望といふ一書を出版したるに、レノアチグの

壯年なる學士アウグスト、ゲルマン、フランク及其他壯年の學者等之
 に加擔して聖書を讀み且互に教誨するが爲に殊別なる集會 (Collegia
 Pietatis) を立てたり。是なむ、彼等の「ピエティスト」即敬虔者と稱せられし所
 以にありける。「ピエティスト」の「リベラル」教會の信條より分離して別
 一派を爲すことを望まざり、其中にありて徳義の改良を盡力せんことを
 望みたりしも、別に集會を爲して波羅提士丹教神學の煩瑣主義（スホラスチカ）の方向
 一般に同情を表せざりしかば、其猜疑を招きて嘲弄窘迫せられたり。さ
 れど後シメオンのメルリン宮殿の傳道者となりて大なる勢力を得、アラ
 シケの其頃新に開校したるガルリ大學の教授となり、日耳曼の古き諸
 大學の乾燥無味なる煩瑣主義の方向に反對して、己が主義を此大學に
 固めんと盡力したりき。抑「ピエティスト」の日耳曼に於て宗教的感情を振
 起し、徳義を矯正せしこと少からざりしといへ、獨り基督徒の徳義上

にのみ意を注ぎて、頗る冷淡な信仰の定理を待するの風を傳播し、且後
 は其費心を主として基督徒の外部の行爲に向け、瑣事の極端な走
 れり。即た衣類及過活上の有害なる奢侈、例へば舞戲、脚牌、喫煙等に
 敵對するのみならず、無害なる齷齪、例へば遊歩、遊興、嘲笑等（ハナドリガ、カサネ、カサネ）も敵對せ
 り。かくて此派の日耳曼の波羅提士丹教中に頗る其徒を得たりしかど
 分離せる別派となりざりしなり。
 十八世紀の始は當て「ピエティスト」と同一の方向を取りつゝ、儀式上頗る
 古教會に近き會衆日耳曼に起れり。之を「ケルンツタル」といふ。此派の元
 と新會はあらざりて、既に十五世紀より日耳曼に於て窘迫を受けて散
 布せし彼「ボケミヤモラウヤ」の兄弟（タホ、カ、カ）と稱する古會衆の殘黨
 なり。十八世紀の二十年頃、當て其黨の一分の「ルザチヤ」の「ケルンツト
 と稱する一小村と己が避難所となしたりしに、其領主ニコライ、リユー

ウヅグ、ラウチン、チン、ドル、フ伯の學あり才あり富貴にして、壯年の頃より教務に従事せんことを望みし人なるが「モラウヤ兄弟」の過活嚴格にして敬虔なるも、其整然たる体制及勸誘的の儀式とに心を奪われ、之に加入して只管ひたすら其徒を波羅提士丹教の信條に近かしめんとしたりしかば、「ケルンケタル」の稱を受けし「モラウヤ兄弟」其感化によりてアウグスチンルツの信條を信認することを諾し、且頗る冷淡に基督教の定理を待するの精神をも「ピエテ、イスト」に受けて、基督教の教旨の全くハリストスの贖罪の死に於ける信仰又在りと雜めつゝ、頗る冷淡に其餘の定理を待するに至れり、然れども其禮儀及神職の体制を波羅提士丹主義の他會に比すれば、稍古昔の東教會に近し、彼等の活潑なる讚美歌祈禱と共に、洗足式及領聖前の接吻等古代の風習と共に、愛の晚餐と共にし、執行せらるゝ所の嚴肅なる聖體禮儀を有し、神職の古制を守りてモリスコ生數

ゾスワキナルデアコンデアコニスナ司祭補祭女補祭の職を存す、會衆内部の体制嚴密なり、有配、獨身、婦真、童男、童女等の會員を區別會衆に監察者ありて、下等各員の品行を監察す、過活の狀態「ピエテ、イスト」風として嚴格なり、凡そ世人が此派に對して責むる所の前に受けし窘迫の影響もよれるにや、其甚隱然として孤立し、懷疑的ヒンリタチ、ウチハヒヤカク社會の進歩を待し、廣く學術の發達し開化の外形の整頓するをさへ排斥するそのまはよめれども、其之を譽むる所の、其篤實質素精勤敬虔なるも、他邦の不信者間も基督教を傳ふるも熱心なるとあり、
十八世紀の三十年四十年も當り、一分の日耳曼の「ピエテ、イスト」「ケルンケタル」の刺衝も縁り、一分の自身に因りて、英國にも斯かる神祕道德主義の會衆起れり、之を「メソヂイスト」といふ、其植礎者の「オックスフォード」大學の壯年なる學生「ジョン、ウエズレイ」及「ケオルグ、ウヰット、フリード」にして、其内部に基督教徒の狀態を全備することと其必要なることを先づ其友人たる大

學生の中に傳へたりしが、後アメリカに航して彼地は傳道し、尋ぎて歸國して後の首として平民に向ひ、屢屋外の集會を催して之を傳道せり。

「メトヂェスト」がかの日耳曼の温和なる「ピエテリスト」と端齋なる「ゲルンダナル」などに異なるの点の、其傳道者が嚴酷なる詰責及奇異なる暗示を以て、殊に聽衆の想像を刺戟することを好むと他の信條及公の奉神禮儀に對して、狂信的の敵意を表すと云ふありとす。抑、其「メトヂェスト」と稱せられし嘲稱にして、彼等自らも屢、偽信偽善に陥りつゝ、敬虔心を民間に振起し基督徒の生活を或る一定の規矩に循らしめんとせしによるなり。そのとみかくに「メトヂェスト」の傳道者の大に勢力を民間に得て速に英米に傳播せり。

次に神祕道德主義の反射として羅馬教國に起りし「ヤンセニスト」及「クウエテスト」なり。

「ヤンセニスト」の佛蘭西及荷蘭に起りし起因の下の如し。十七世紀の四十年は當りて、少しく其前に逝去したる主教ヨルネリイ、ヤンセニイを尊崇する輩の、其遺著福アウグスティンを世に公せしに、「エズイト」の徒の己が徳義上の所説は反する意見の其中にあるを見て、之を絶々に告訴したり。然るに絶々の「エズイト」が毀損し、誇言して具陳したる若干の斷案に由りて、該書の異端なりと判決して禁令を下し、^{カバ}「ヤンセニスト」の之を防禦して「エズイト」の間に激論を起したりしが、「エズイト」の其徳義上の所見に於ても、其所爲に於ても、甚見苦しかり。ヤンセニストの首に立ちたるの、ソルボンの「プロフッソル」アル、^{ハリス}にして、^{ハリス}リスに程遠からぬポルトロイアリの女修院長たる已が姉妹の家に住みたりしかば、ポルトロイアリの「ヤンセニスト」と「エズイト」に對する敵對との重なる隱匿所となれり。其會員の「エズイト」に對して爲せる攻撃

中よそ殊よ力ありしハ、ルイ、モシ、リトといふ假名を用ひて有名なる
 學者著述者たるバヌカリの出版せし著書地方書（Lectures Providence）な
 り。かくて十八世紀の始に至リ「ヤンセニスト」グネルが新約書の註釋を
 出版して後ハ、兩徒の爭論其高度に達シ、フランスの高等神品中にも
 此出版は同情を表せし者多くして、パリスの大主教「カルデナル」ノオア
 リ及有名なる「ボスシ」も其數中よりありき。かれバ「マオオキ」ハ斷然
 聖「ヤンセニスト」を教會より除名せむことハ尽力して、之を苛く窘迫じ
 たりしかども「ヤンセニスト」ハ危々が自身等の上は施せる除名を承認せ
 せ、依然として自ら羅馬教會の正員なりとし、現時に至るまで新「ウ
 レ」トに住する自會の主教を選立する毎ハ、使者を危々に遣して其認
 定を乞ふも、危々の常ハ其上申へ答ふるに新除名を以てせむ。されバ「ヤ
 ンセニスト」ハいかハ羅馬教は忠なる者たらんを望むも、他の羅馬教徒

よ合一せせして時を経るよ從ひ、稍、羅馬教の精神を遠かりて其定理及
 外儀を悉く受けて、且他の羅馬教徒より我見執拗少く、内部の徳義
 を發達せしめんとするの傾向多くして、頗る神祕論ハ好意を表するに
 至れり。
 「ヤンセニスト」殆ど同一時に「クウニエニスト」（新教徒の譯書）と稱す
 る一會も羅馬教會の内に傳播せしが「ヤンセニスト」よ比すれば一層神
 祕主義ハ傾けるものなり。其植礎者の羅馬は住居せし西班牙國の「司
 祭」ハ、モリスにして、教へて曰へらく、基督教の真正なる教旨ハ
 外面ハ教會の禮儀を成就するにあらず、内心ハ欣喜して神ハ歸向し安
 息する（「クウニエニスト」の譯書）ハあるなりと。然るに「マズイ」ハ之
 後異端なりとして危々に訴へしかば、モリスハ遂に己が著書中の著
 于斷案を異端として咒ひざるを得ざりしのみならずして、終身の禁獄

に處せられしかば、其所説に左袒する者も出で來れり。而して其最も熱切なる尊崇者となりしハ、佛蘭西の富豪なる寡婦ジャンナ、マリヤ、ラモト、ギニオン（イタリヤ）として、這説を傳播するが爲に己が地位と一生とを犠牲にしたり。されどラモト、ギニオンの陳述によれば、稍嗜慾的感情的の質を帯びたるが如くなりしかば、其傳道の多くの人々（ホツシユエト）も疑訝せられたりしも、とにかく其文章中に熱切深奥なる基督教的の意味多く、且其高尚なる徳義の心地を以て多くの人々を誘引せり。而してラモト、ギニオンの保護者となりし者の中より、有名なる雄辨の傳道者たるケブレインの大主教フ、テロン（フ、テロン）もありしかば、フ、テロンの後に能々の促す所となりて這説を棄てたり。

第十三章 十八世紀の後半期に於て傳播したる偏理論、唯物論、自然神教、マソン派、シウエデンホルギアン派、降神術

十八世紀後半の西歐にありて吾人の注意を引く者のハ、基督教一般及諸宗教一般に對して敵意を表する一主義の、羅波兩教國に傳播せしことにして、かの基督教所説の或る一部分を彼此に改釋する新黨派の現出せしことハ之に及ばざるなり。抑此ハいハゆる一主義といハ、偏理論（ラチオナリズム）の名稱を以て世に著しき者として、人の理性を以て宗教上及其他諸般の問題を決定する最上唯一の決斷者となし、宗教界の凡ての祕事奇跡を否定し、時としてハ基督教の道德に同情を表することあるも、基督教の定理界及外儀界の一定正確なるものを悉く排斥す。されど此主義ハ、種々なものとの適宜なる這説ハ英國より佛蘭西、日耳曼及其他の諸國に傳ひ、十八世紀の後半に於て殊に二様の体形（フホレム）を爲せり。其一ハ唯物論の体形として、たゞは宗教を排斥するのみならず、人生の高尚なる神靈上の諸現象及諸般の活現象をも、器械的の法則と物質界の諸力とによりて解

明するものなり。其二、自然神教の体形にして、宗教の根本たる二概念、即神之存在及靈魂不死を承認すれども、神の世界に於ける直接の關係、神の人間に啓示し得べきことを排斥し、一定の諸宗教、諸定理、諸外儀等を排斥して、是等の皆善良なる徳義上の目的ありてか、然らば私利を圖りて人類を欺かんとしたる人々の構造物と出づとするなり。一般に十八世紀の偏理論者が宗教と教會とを攻撃するも、宗教の所説に向ひて端齋なる法式的の評論を下し、もの少くして、斷章的皮相的の評論多し、しかも凌辱的の戲弄、戲言、嘲聖罵僧等を以てせし者も少からざり。此主義の始に先づ西歐の上流社會に傳はりしが、後、中流下流の民間にも入り、殊に佛蘭西に於ては、十八世紀の終に至りて其極端を達し、その革命の際に全く基督教を廢止して、理性教なるものを宣言せんとす。試みもかども、人民の多數は當時尙頗る心を基督教に屬したるし。

亦、幾何ならずして衰へり。其存続の爲め、諸國の諸宗教の衝突、然るに此破壞的の觀念は反對して、基督教の正確なる定理か、然らば少くも其徳義上の傾向は高尚なる神靈生活に於けるの信を維持せんとす。其徒中より起りし者あり。されど是亦宗教上の或る一種の派といふべきものなり。其中にて殊に有名なるは「アーン派」及「ソルベールギアン派」にして、後者の後には降神術の原由となれり。また「マルティン派」の植礎者の佛蘭西の神秘論者セ、マルタンなりとす。故に始めて「マルティン派」と呼べりしなり。其最初の目的は、人民を教化し、徳義を改良して、以て當時傳播しつゝある排斥論を反對し、高尚なる神靈上の傾向を社會に維持せんとするにありき。されど彼等の鞏固なる定理上の信認を有せず、剩へ冷淡に基督教の定理を待して、種々なる信條の

信徒を自會に入れつゝ、自會の爲に嚴肅なる特別の儀式を設け、最大の價値を自會に附せん爲に力めて、秘事を以て之を覆へり。抑其「マソン」又ハ「ラウレンツマソン」由なる石工と稱するは、捏造的の昔話よりて、此會乘ヲ始ラ爲シ、ハ彼イエルサリムソロモン聖堂ヲ建テシ智者等ニシテ、中世紀ニ於テハ武族、タンプリエルシムワタル此智ヲ有シ、近時ニ於テ其後嗣者トナリタルハ「フランクマソン」即自由ナル石工ナリといひなす。因るなり。かゝれば「マソン」徒は自會の表記外儀と、造營の工事に取リて、錘、圓形、三角形、多角形等を其高尙なる觀念の表記とし、又其會衆を區分して多數の會合(log)とし、會合毎に其「マスター」長ありて之を治理し、大「マスター」を其首長とす。此會に入るよりは、秘密の儀式と呪咀とを爲し、既其會員となりたる者は、其智徳の全備するに循ひて、漸次は種々の階級を経過せざるべからせとし、其各階を経る毎に新し秘事儀式を傳ふ。

「マソン」徒ハ其始より排斥的の觀念を敵對し民間に教化施濟を布きて少からざる利益をなしたるに似せ、其複雑なる表記は反りて或る人々の爲に閉散の遊戯となり、又ハ其秘事を名として政事上の種々なる企圖を爲さんとして之を入會し、又ハ高貴なる會員の庇蔭を依りて立身せんと欲する自利の計算によりて之に入會する者もあはせり。此派ハ卡瓦世紀の終より其徳義の感化によりて頗る強盛なりしを、今世紀の最初の四半期より漸く瓦解して、三十年頃には全く其信用をも失へり。
 「シウエデン」スウェーデン「ホルギアン」派の植礎者の瑞典の博物學者「エリク」エリクソン「シウエデン」スウェーデン「ホルグ」にして非凡の才と具人、深考博識にして甚だ有名なるも、極端なる偏僻者妄想者なりき。其根本信用の下の如し。曰く、物質世界ト神靈世界トノ間、地及地上ノ世界ト地下ノ世界トノ間ニハ斷乎タル區別アルニアラスシテ、彼此兩界ニハ共ニ同一ノ理法關係アルナリ、地ノ生活

ヲ終へて死ニシ人々の靈魂ハ地ノ組織ナシ蓋物ヲ脱スルモ精微ナル
 神靈ノ体ヲ保存シテ或ハ己ガ發達ノ度ニヨリヲ愈高ク上昇シテ或
 者己ガ醜惡不潔ナル嗜慾ニ泥ル度ニヨリ亦愈低ク墜落スルヲ不潔
 諸層ニ移住ス是神使ハ惡鬼ト人出ヅル所由ナリ神使ト惡鬼ト云フハ天界ノ神使
 死ニ別ニあるにあらざりト云フ物質世界と神靈世界との間、生者
 の靈と死者の靈との間に交通を爲し得べしといふ之を基けるなり
 所ニ住まざる者の地位と状態とを詳述す而して此言を以テ特ニ其
 自ら其妄想體の謬話を熱信シ實際ニ於ても睡遊の或る能力を有せ
 しとによるなり斯がれば疑深き懷疑者すら其或る託宣の如きもの之
 を疑ひ得べしと云ふなきなり其のみならば此言を以テ其神靈の幼穉

の味ト成る異端の思想に染みし人なり一新教徒の神靈
 の感化の下ニ生長して神父神聖神の個位なるを否定しつ神の位
 格ト獨一主を認メテ其力スルのみを承認せり此等之を以テ
 新奇なる著述と箇所によりて深者なるを極成ニ放棄なる聖書の註
 釋と種々の神異神靈上の旅行天堂地獄等の敘述とを多く遺したるも
 概々手書なり手書ト云フハ
 奇怪なる觀念を傳播するの助となせり而るも此派の去世紀より左
 程の進歩なきにして其徒弟の立てし教會も頗る少なりが降りて今世
 續いて至るまで十分の輕躁なる好事と妄信との影響より十分の魔術
 者の射利心より由りて媒介者法を用ひて他界との交通を殊に感得し易き人
 也を以て神靈世界と交通するの術大ニ傳播せり是所謂降神術に比
 大ニ英米へ行はれ後其他の諸國もも行はれしとは其徒が自黨の員數

を百万又は千万と算へしにても知るべし。かくて其徒の中よりは已が自ら得たりといふ神靈との交通よりて、新なる宇宙冥想及信條と組織せんと試むる者もありたれども、此点に於ては何等の著しきことも其發見する所とはならず却りて「スピリット」自身すらも其得たる啓示の相矛盾して虚妄と顯るゝことの屢なるも、其啓示の神靈よりすると疑はしむるは多くは其信死す可らざることを、さるからは又術を用ひて神靈に交通し得るゝの疑しきことを認むるなり。

第十四章 今世紀に於て傳播したる「イルウウ・シギア」派「レド」

十九世紀に至りては、西方の基督教國殊に英國及北米には更なる若干の新派起れり。さるは當時此國々に於て、宗教的生活の著しく振起したるに、其不正なる方向を取れることによるなり。其新派中より稍記憶するに

足るべきは「イルウウ・シギア」派「モルモン」の両派なり。

「アレスカ・テリアン」の傳道者「エドワード・イルウウ・シギア」派の基を「ロンドン」に置きしは、今世紀の三十年頃なり。氏は世末の運きあるを固信して傳道すらく、基督教會と其純潔なる最初の状態より復して、使徒時代の如く神靈上の格別の恩賜たる預言、方言説教等、及高等非凡の職たる預言者、使徒、福音者、神使とも再興するは必要なりと。氏の徒弟等は皆之と容れて、考古學上の研究よりて知り得たる古代の聖體禮式は之と興し、且熱切に廉潔博愛を興さんとに努力しつゝ、自ら末日の諸聖と稱して其傳道者を各地に派遣したり。而して其人々を誘引するや、其徒とならんとする者に向ひて、従前の如何なる信條をも諱むことと促させしめて種々なる定理上の信認を有する人々を入會せしむれども、其傳道中には左程の進歩なし。

「オールド・ミッドランド」派の外（オールド・ミッドランド）に起りたる新派あり、「レド・ストーク」派といふ、其植礎者は英國の「セルド」（セルド）「ドレストク」にして、其所説には何の新奇なる事もあるなほ、其傳道の主旨は、吾人の救贖は各人個々の努力功勞によるべからざりて、神の恩寵によるべしといへども、吾人は善事を爲し、神に降者を救済し、聖書と讀みて、己が信仰を之に堅むるを要す、又聖書中に直言せられざる者、（聖人の尊敬、死者の記念、不朽体及聖像の敬拜、神職、外儀等の如きは悉く之を排斥せざるべからざり、とす）とするべし、（近時）に於て基督教毀壞の極端は走り、北米合衆國に起りたる「モリス」派にして、千八百五十五年は、（オールド・ミッドランド）なる者之を基せり、（オールド・ミッドランド）傳道すらく、予は神の啓示によりて一銅版を「ニウ・ヨルク」の二丘を得たるに、古文ありて、（オールド・ミッドランド）の十支派王國の亡滅せし後、其餘黨

と其に「亞米利加」に移住して死去したる「オールド・ミッドランド」最後の預言者「モリス」の教戒と神の啓示とを録せり、とかくて又、自ら神の啓示によりて其遺言を英語に翻譯したりといひ、（モリス）の書といふ表題を以て之を出版せり、時は「ニウ・ヨルク」の一傳道者「ソロモン・スポウリディング」の宴席の同書に載する所は、皆己が夫の曾て著作して「スミト」の朋友「（オールド・ミッドランド）」を植字者とする活版所へ渡せし歴史小説の斷片なり、（オールド・ミッドランド）公言したりしかば、此公言は以て「スミト」の傳道の妨礙とばならざり、抑、（オールド・ミッドランド）派の所説は、一分にては「モリス」書の陳ぶるところに基き、二分にては彼等、（オールド・ミッドランド）新預言者の自身に得たりといふ啓示に基き、基督教の見解と異教の見解との奇怪なる混合をなし、一神を傳道すると共に他の下等なる諸神、殊は北米の異教人が曾て尊敬せし神靈に於けるの信仰を維持して、公に多神教を再興せり、而して其傳道の重

なる基礎は労働の觀念よして、人は幸福を他生に望むの要なし、第不斷の労働によりて、己が地上の安寧を計らざるべからせとし、其會衆の体制は務めて厚生の的の構造を走す。されば渡世上の唯物主義と宗教の高尙なる目的とするなり。抑、北米合衆國は諸宗教に對して寛容なれども、獨りモルモン派の傳道のみは人民の激昂を遇ひて、其傳道者は繫獄死刑に處せられ、其徒弟も亦到る所を窘迫を受けたり。されど労働教を傳ふる者の忍耐は之よりて弛むとなくして、己が宣教師を太遠き國々へ派遣し、何地にあれば、其教の堅立するに至るときは、能く其會衆を以て經濟上の安寧を得せしむ。

近時に於て新派の起りしとは以上陳ぶるが如くなれども、かの排斥的偏理主義の全基督教國に傳播するに比すれば、其基督教を害を及ぼすを少し。排斥的の偏理主義は、十八世紀に當りて既ち著しき度と達し、十

九世紀に於ても、フホセム漢体形新を追ひ、或はカントの徒の評論主義、或はシエールグロチウスリングヘーゲリの徒の萬有神教、或はフイエールバールフビエフネルフホフト等の唯物論、或はコントミルの實驗論、或はダルウウウン及ゲツケルの進化論、或はショッペンガウエル及ハルトマンの厭世教等蔓延して止む時なし。而して其特に傳播せる体形は、斷片無教系不次第以上の諸說中より排斥的の觀念を取れるものにして、近世諸教會の皮相無定見なる代表者は多く之を主張す。殊に此を嘆きべきは、西歐基督教國に於て偏理論の逐時は神學界中よりすらも入り、シトラウスバウルレナン等の如き學者の勤勞も入りて、基督教の定理と歴史とを對して極端なる排斥的の業と結ぶに至れるとは是なり。

近時に至り、實地生活上の點に於て基督教社會を恐喝せしは、社會主義の蔓延なり。此主義は、外見上、高尙なる基督教の原理たる、他愛と下等人

民の地位に於ける其分と、充全なる自由、諸人一般の平等、兄弟的の交際
 に於ける志望と、依憑するが如きも、實際に於ては強迫、殘害、破壊の精
 神と、全く現存社會の秩序關係——社會の生活、宗教、家族、財産等の基本
 をも覆さんとする志望とに貫徹せらるる者なりされば、其一個人の上
 に又は社會總体の上、種々の在暴惡逆を爲し、は、左まで久しくはあ
 らざりき。
 夫れ以上陳ぶるが如くなり、と雖、基督教會は、以前に於ても危険なる敵
 に遇ふと多かりしなり、されど陰府の門之に勝つ能はせと宣ひし教主
 イ、ス、ハ、リス、トスの聖約は、其れ必を壞られせして永遠に存せん。

西教一斑終

正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
六	一	なり。ノ下	夫れノ二字ヲ脱ス	百〇四	二	嚴肅的諸行等ノ	等ハ衍
全	十一	何人	何人	百〇九	一	烈激	過激
二十三	十二	filogue	filogue	百二十一	十二	彼更洗者	被更洗者
二十七	十二	世々の前	無始無終	百二十八	十一	古代	古き
三十九	八	痛悔者	痛悔者	百二十九	三	一派	一党
六十	二	正加	正羅	百三十一	信	信仰上	宗教上
六十一	六	confirmatio	confirmatio	百三十五	四	遊歩ノ下	會ノ字ヲ脱ス
六十七	九	祭品ノ下	(ヲ脱ス)	百四十一	二	我見	我慢
八十六	八	詭譎詭辨	詭譎詭辨	百四十三	外	儀	禮儀
九十	六	信仰	宗教	百五十二	四	されは	され
				百五十六			

明治二十四年四月二十八日印刷

明治二十四年五月十六日出版

發翻
行譯
者者

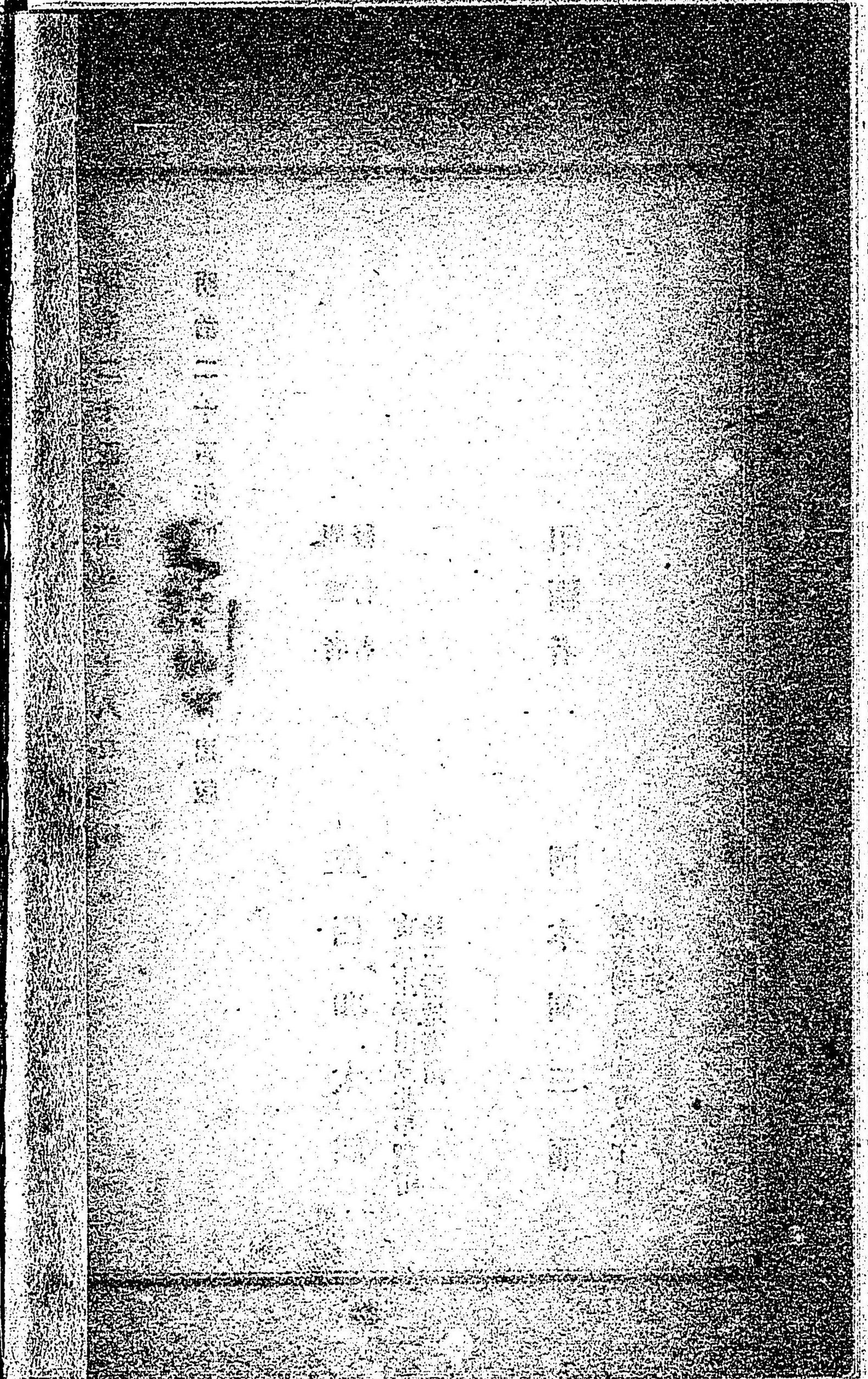
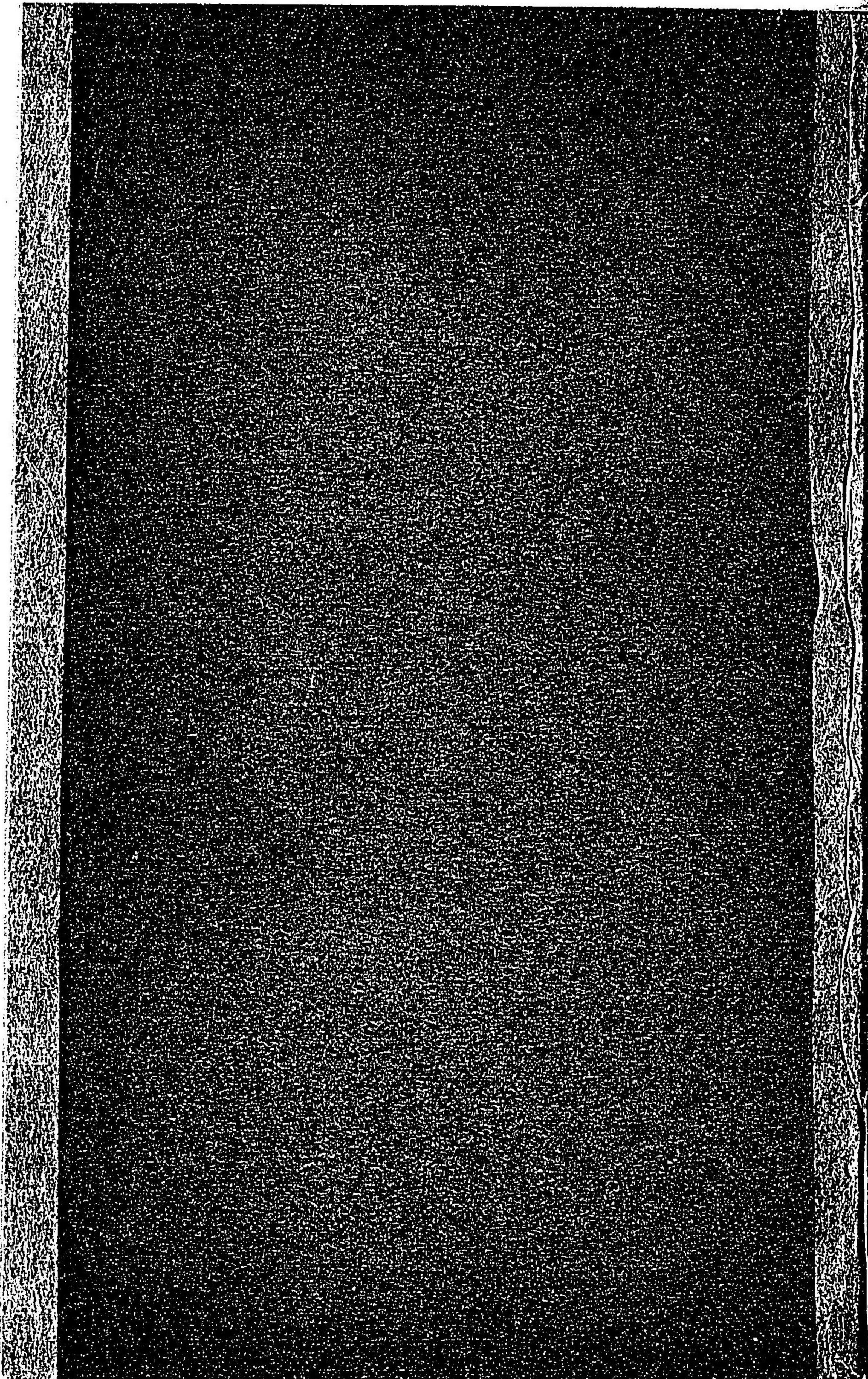
吉田卯太郎

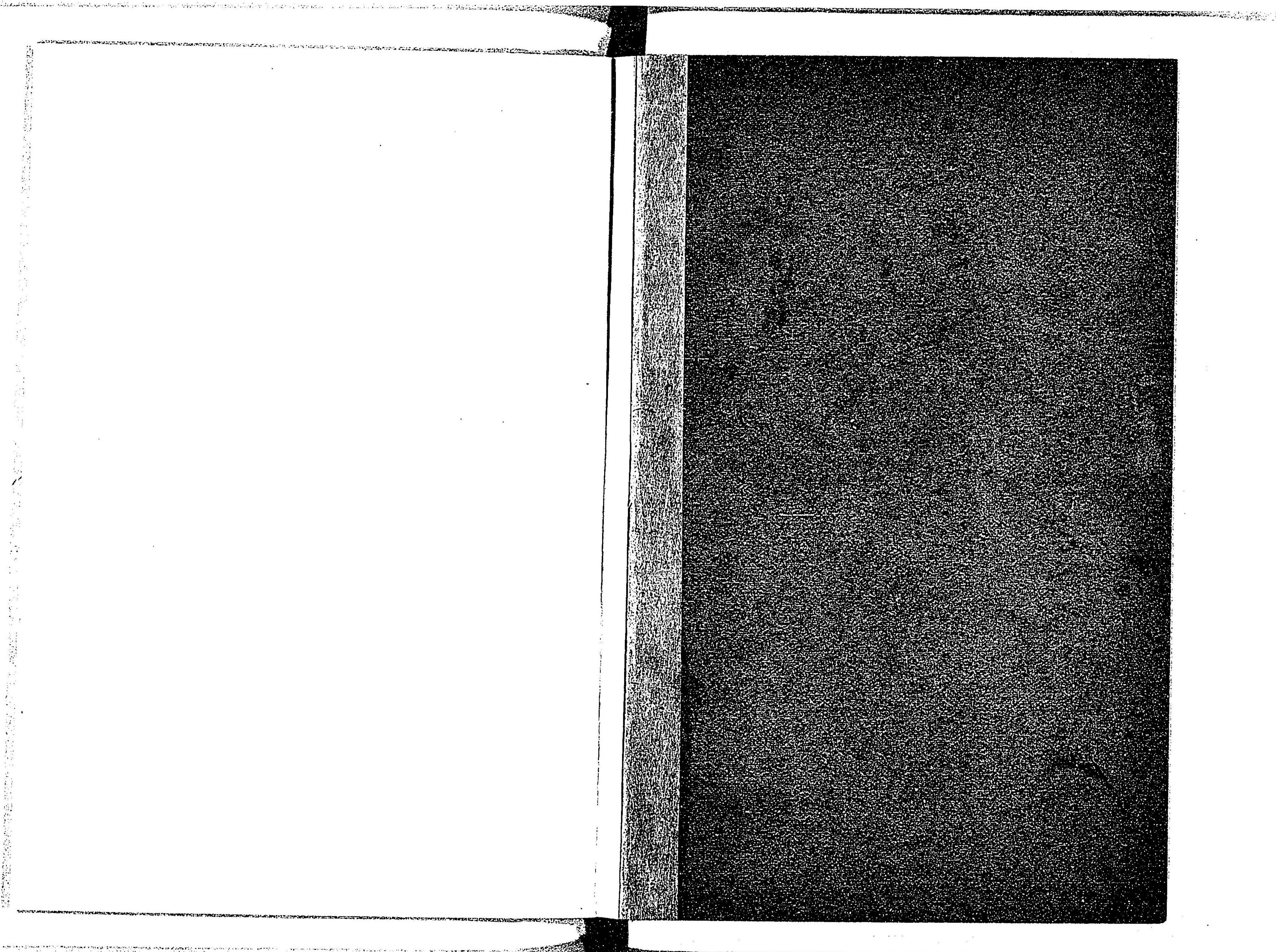
東京市神田區北甲賀町
拾三番地寄留

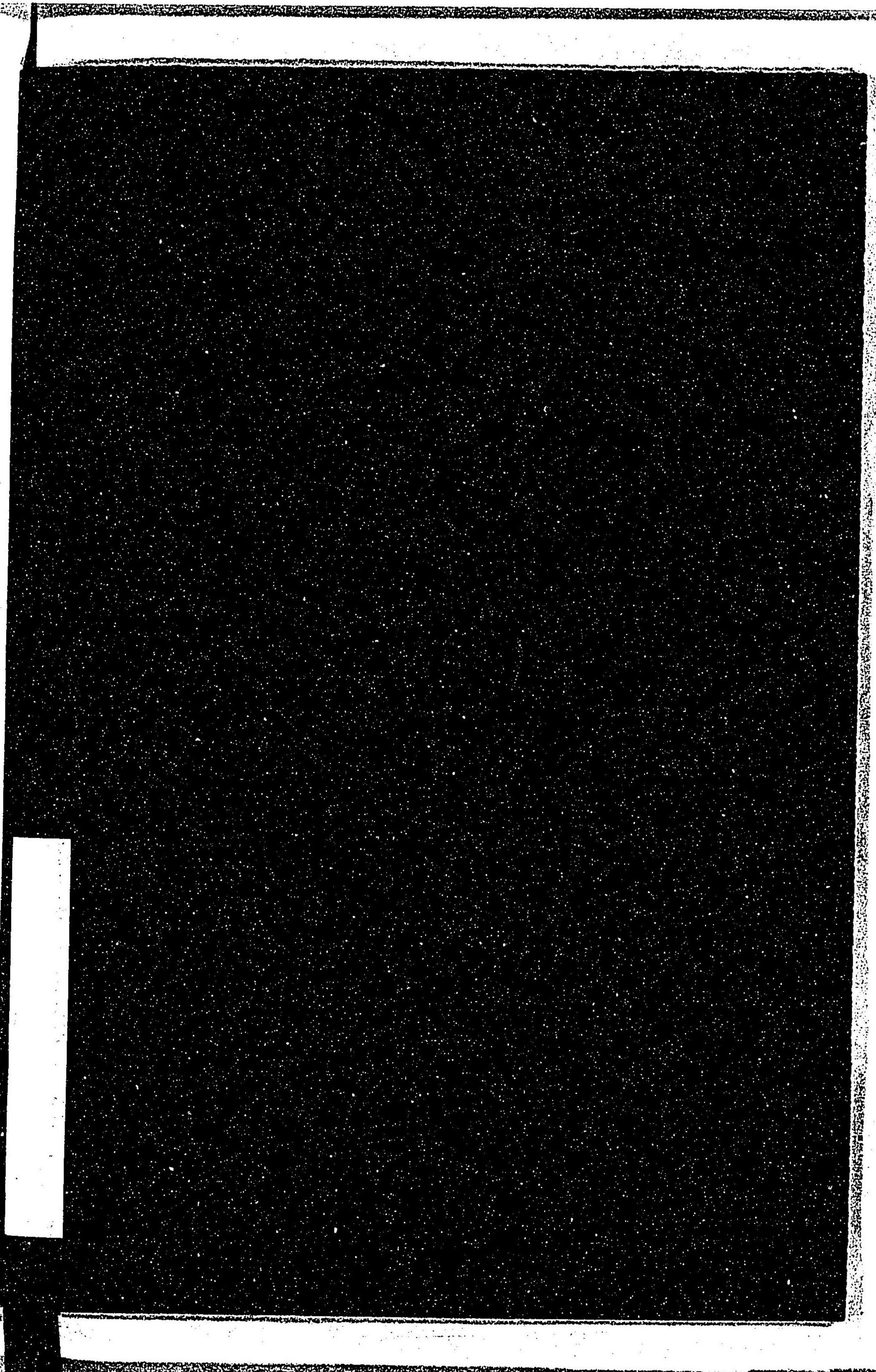
印刷者

岡本利三郎

東京麴町區麴町拾丁目
四番地







特18

405

西教一斑

国立国会図書館

020869-000-8

特18-405

西教一斑

ア・ム・イワンツォフ・プラトノフ/著

M24

ABI-0702

